

# 海の祭情報整理

海の祭ismプロジェクト2020



## 海の祭とは

### 海の祭とは

海の祭の定義	p.3
祭祀と祭礼の種類	p.4
海の祭の分類	p.5-p.9
代表的な海の祭	
・ 一覧表	p.10-p.11
・ 日本三大船祭	p.12

### 海の神とは

記紀の神	p.13-p.15
民間信仰の神	p.16-p.17
森羅万象の神	p.18

### 海の祭の地域における機能

p.19

### 海の祭の消滅原因

p.20-p.21

## 海の祭の調査

### 海の祭の調査実施概要

p.22

### 海の祭の価値

2019年度調査結果	p.23-p.24
2020年度調査結果	p.25-p.28
まとめ	p.29-31

### 海と生きる人にとっての祭

2020年度調査結果	p.32-p.36
考察	p.37-p.42

### 海の祭の課題

現状	p.43
調査結果からわかる矛盾	p.44-p.45

## 海の祭の未来へ

### 海の祭のためにできること

できること1	p.46
・ 海の祭を知る人の性向	p.47-p.50
・ 認知度向上の施策	p.51-p.53
できること2	p.54
・ 海の祭の記録事例紹介	p.55
・ 海の祭の記録方法	p.56

### 海の祭ismプロジェクトができること

p.57

### おわりに

p.58

### 参考資料

参考文献/URL	p.59
2019年度調査海の祭情報	p.60-p.69

数：約10万～30万

祭

陸の祭

海の祭

山の祭

数：約4600

今回のプロジェクトにおける海の祭

信仰に基づく  
伝統的な祭

市民の祭

商業の祭

海の祭の大分類

信仰に基づく伝統的な祭は、祭礼＋祭（神事）で構成される。ここでは、**祭祀**（神事）に海が関係するもの（神社の御祭神が海の神、大漁祈願等）、**祭礼**に海が関係するもの（海で行う、船を使う等）、また海が持つ交通や交易的役割に祈りを捧げるものを信仰に基づく伝統的な「海の祭」と定義する。

- ・祭祀とは：感謝や祈り、慰霊・鎮魂の目的のために神々や祖先をまつこと
  - ・祭礼とは：わざおぎ、日本の祭りで行われるパフォーマンス、地域ごとに多様性に富む
- ※祭祀と祭礼に厳密な区分はなく、あくまで便宜的な区分である

地域に根づいた行事としての祭で信仰に基づいた伝統的なものではない（例：町内会・自治体主催の夏祭り、花火大会／戦後からの盆踊り／文化祭・学園祭など）

商業イベント（例：海や沿岸部で行うチケットや入場料が必要な有料のイベント、全国から人が集まるロックフェス、アートフェス、食フェスなど）

# 海の祭とは—「祭祀」と「祭礼」の種類—

## 祭祀

### 海への祈願

海上安全

大漁豊漁

海難者慰霊

御祭神（海の神）への  
感謝

## 祭礼

### 海に関する祭礼

海中渡御

海上渡御（船）

競漕

精霊船/精霊流し

禊

海産物の奉納



船に神輿を乗せ海上を巡航する



© 2000-2020 Naha City Tourism Association. all rights reserved.

船に乗りレースを行う



神輿や人が海に入り身を清める



山車や神輿が海の中を巡行する



船や灯籠を海に流し霊を弔う



©とし坊のお祭り三昧

御祭神へ海産物を奉納する

# 海の祭とは—「祭祀」「祭礼」別タイプ分け—

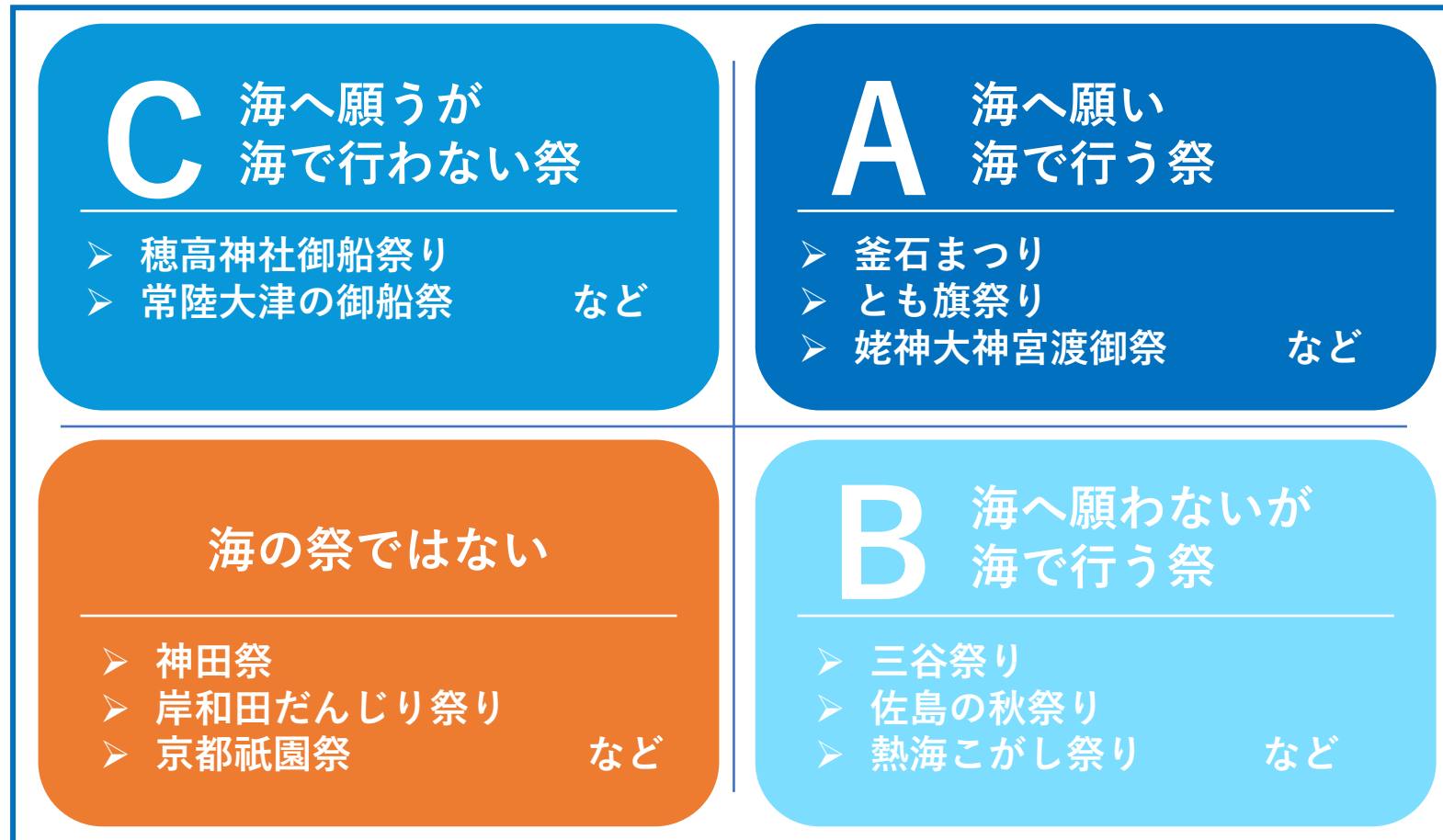
海上安全や豊漁など  
海に関する祈願をする



海への祈願（祭祀）



先祖供養や疫病退散など  
海以外を信仰対象とする



海以外（陸、山）



祭礼の場所



海

## 代表的なAの祭 とも旗祭り（石川県能登町）

豊漁・海上安全を願い全長30メートルのとも旗を立てた船が港周辺を巡航する漁師の祭

とも旗祭りは、能登町の小木地区に本格的な春を告げる御船神社の春祭り。御船神社の御祭神は交通を司るサルタヒコで、昔佐渡の小木へ漂着した地元漁師が信仰を持ち帰り祀ったとされる。

サルタヒコは天狗と同一視される道案内の神。集落の塚など道祖神として祀られる例が多く神輿巡行を先導する姿がよく見られる。

海上安全



イカのまち

石川県能登町小木地区は、日本海側最大のイカの水揚げ地や北前船の寄港地として古くから栄え日本海を代表する漁港だった。とも旗祭りの起源は、漁師の父親の安全祈願と大量祈願を願い、子供たちが始めたと伝えられている。

# B. 海へ願われないが海で行う海の祭

## 代表的なBの祭 三谷祭（愛知県蒲郡市）

神が神へ逢うために男衆は山車を曳き海中渡御を行う勇壮な祭



三谷祭は、愛知県蒲郡市三谷町で行われる八劔神社と若宮神社の例祭。

若宮神社の御祭神（応仁天皇）が船形の山車に乗り八劔神社の御祭神（ヤマトタケル）に遊びに来るよう挨拶に行き、ヤマトタケルが快諾して応仁天皇に会いに行く。

### 逢瀬の物語



### 海中渡御

三谷祭の目玉である海中渡御は、山車を曳きながら海へ入っていく珍しいもの。八劔神社と若宮神社の間はかつて海だったこともあり古来から海中渡御が行われてきたが1959年の伊勢湾台風を境に40年間近く中止。1996年から復活した。

# C. 海へ願うが海で行わない海の祭

## 代表的なCの祭 穂高神社御船祭り（長野県安曇野市）

安曇族が海人族である証と誇りを紡ぐ山国の海の祭

### 山国の海人

御船祭りのクライマックスは、2隻の大きな船形の山車が豪快に船体をぶつけ合う。何故海のない安曇野で船なのだろうか。信州安曇野は、有力な海人族の一つ安曇族が開拓した事に由来する。穂高神社にワタツミ(p.14)が祀られていることもその証と言える。海人族は、農耕民と違い土地に縛られないため移住に積極的だった。



古代、日本には海人族と呼ばれる集団が存在した。海辺に住んで漁をするだけでなく、航海を業として交易/通商にも従事し、戦の時は海軍として戦った。記紀など神話の世界で活躍しているのは概ねこの一族である。歴史時代以降は天皇家と強く結びつき王権を支えた。

あま  
海人族





海が持つ交通や交易的役割に感謝を捧げる「海の道」にある祭。  
北前船に乗って各地に伝播した祭や、海上交通に重要な役割を果たす目標となる山に漁師の信仰が集まる祭がある。

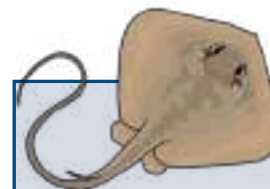
## 土崎神明社祭 曳山行事（秋田県秋田市）

海運業で栄えた港の風情の残る郷土に愛される海の祭

江戸時代中期から明治30年代頃まで、大阪と北海道を日本海回りで、商品を売り買いしながら結んでいた商船群のこと。北前船により商品だけでなく文化も地域へもたらされた。

一見海と関係のない祭も、歴史を紐解くと北前船が地域と深く関わっていることがある。

北前船



カスベ

土崎神明社祭曳山行事は別名「カスベ祭り」と呼ばれ、祭りでは「カスベの煮付け」がもてなし用の料理や酒の肴としてふるまわれ、祭りの風情を醸し出す味として欠かせないものとなっている。カスベとは、北海道の方言で「エイ」を指し、西回り航路で北前船の重要な寄港地だった土崎に、北海道から運ばれてきた様々な物産のひとつ。9

# 代表的な海の祭一覧 (2019年度調査：あなたが行った海の祭ランキング)



順位	名称	時期	場所	御祭神	祈願	祭礼	由来	分類
1	釜石まつり	毎年10月第3土日	岩手県釜石市	尾崎神社 (ヤマトタケルノミコト/ワタツミ)、山神社 (製鉄所守護神)	海上安全、大漁、2011年以降は復興	神輿海上渡御 (曳き船)、神輿市内渡御、虎舞、神楽、鹿踊、行列	釜石の守護神として崇敬されてきた尾崎神社と日本製鉄所の守護神である山神社の例大祭を昭和42年から合同で行うことになった。	A
2	浜降祭	毎年7月第3月曜日 (海の日)	神奈川県茅ヶ崎市	寒川神社 (寒川大明神/江戸時代まで八幡さま)、明治6年以降鶴嶺八幡宮 (八幡さま)、その他32神社が参加	お礼参り、禊	禊 (神輿が海に入る)、神輿市内渡御 (禊後に各神社へ戻る)	天保9年寒川神社の神輿がの渡御中、氏子同士の争いで川へ落ち行方不明になったご神体を南湖の漁師が助けお礼参りするようになった説と、鶴嶺八幡宮で毎年浜辺で禊をしていた説がある。元は寒川神社の例祭で明治6年以降鶴嶺八幡宮、他の供奉神社と合同で行うようになった。	B
3	海神社秋祭り ※同神社夏祭り回答者も計上	毎年10月10日~12日	兵庫県神戸市	海神社 (ワタツミ/オオヒルメムチノミコト)	海上安全、漁業繁栄、農業繁栄、氏子崇敬者繁栄	神輿海上渡御、神輿市内渡御、布団太鼓巡行	約1800年前神功皇后が三韓よりの帰路、暴風雨のため帰国できなくなり、ワタツミノカミに祈願したところ風波がおさまり無事に都へ帰還できた。その祈願の場所へ社を建てた事が鎮座の由来。	A
4	ハーリー (海神祭)	毎年5月のゴールデンウィークを皮切りに沖縄各地で開催	沖縄県那覇市、豊見城市、久米島、宮古島、石垣島など	中国の龍神	海上安全、豊漁※各地域により異なる	ハーリー由来まつり、ハーリーによる競漕	14世紀の琉球王が中国留学した際に雨ごい儀式であるドラゴンボート競漕を見て、帰国後琉球で普及させた。	A
5	豊浜鯛祭り	毎年7月中旬の土日	愛知県南知多町	津島神社 (牛頭天王/スサノオノミコト) その他5神社が参加	豊漁、区民の安全と繁栄	鯛みこし市内渡御、船に曳かれ鯛みこし海を遊泳、大鯛海中渡御、太鼓打ち	本社の川祭りにちなんで海の祭をするようになり明治18年頃津島神社の祭礼に興を添えようとハツカネズミの張りぼてを作ったのが始まり。その後魚類になり大正初期に「大鯛」となった。	A
6	塩竈みなと祭 (日本三大船祭)	毎年7月第3月曜日 (海の日)	宮城県塩釜市	鹽竈神社 (シオツチオジノカミ/タタケミカツチ/フツヌシ)、昭和39年以降志波彦神社 (志波彦大神)	御祭神への感謝、海上安全、大漁	神輿海上渡御、神輿市内渡御、陸上パレード、踊 (よしこの鹽竈)、花火	戦後間もない昭和23年、港町塩竈の産業復興と疲弊した市民の元気回復を願って始められた。	A
6	熱海こがし祭り	毎年7月14日~16日	静岡県熱海市	来宮神社 (来宮大明神/ヤマトタケルノミコト/イタケルノミコト/オオナモチノミコト)	御祭神への感謝、無病息災	神輿市内渡御、鹿島踊、神楽、禊 (御鳳輦の浜降り)、山車コンクール	和銅3年6月15日(新暦7月15日)熱海湾で漁夫が網をおろしていたとき、イタケルノミコトの御木像が網に入り、お告げを聞き熱海の西山へ祀った。御神前に麦こがし/百合根/ところ/橙をお供えた。	B
8	宮島管弦祭 (日本三大船祭)	毎年旧暦6月17日	広島県廿日市市	厳島神社 (宗像三女神)	御祭神の御神慮を慰め奉る	神輿海上渡御、管弦、權伝馬船、	平安時代の貴族たちが池や河に船を浮かべる管弦の遊びを、平清盛が信仰する厳島神社に移し神事として行うようになった。	A
8	亀崎潮干祭	毎年5月3日4日	愛知県半田市	神前神社 (神武天皇)、尾張三社 (スサノオ/ヤマトタケル/アメノホアカリ)	地域安泰、災厄防除	山車海浜曳き下ろし、山車市内曳き回し	神武天皇 (御祭神) が東征した際海から亀崎に上陸した伝説にちなみ山車を浜へ曳き下ろした説と、亀崎の地に移り住んだ武家の発起による説がある。	B
8	宗像大社秋季例大祭 (みあれ祭)	毎年10月1日~3日	福岡県宗像市	宗像大社 (宗像三女神)	航海安全、大漁、国家安泰と五穀豊穡への感謝	海上渡御、神輿	辺津宮に祀られている市杵島姫神が、沖の島にある沖津宮の田心姫神と筑前大島にある中津宮の湍津姫神を乗せた2隻の御座船を出迎え、三女神が集まる	A

# 代表的な海の祭一覧 (2019年度海の祭ismで関わった祭)



名称	時期	場所	御祭神	祈願	祭礼	由来	分類
釜石まつり (p.10参照)							
佐島の秋祭り (八幡神社例大祭)	毎年10月体育の日を含む三連休	愛媛県上島町	八幡神社 (神功皇后/応神天皇/ <b>宗像三女神</b> )	不明 (五穀豊穡、海上安全の説がある)	だんじり/神輿市内渡御、 <b>神輿が海に入る禊</b>	不明	B
とも旗まつり	毎年5月2日～3日	石川県能登町	御船神社 (サルタヒコ)	<b>豊漁、海上安全</b>	とも旗を立てた <b>伝馬船が港を巡航</b> する/神輿市中渡御	漁師の父親の安全祈願と大量祈願を願い、子供たちが紙で継いだ小さな旗に船名を書き、それを伝馬船に立てて遊んだ。	A
ホーランエンヤ (日本三大船神事)	10年に1度の5月中旬から9日間	島根県松江市	松江城山稲荷神社 (稲荷信仰)、阿太加夜神社	五穀豊穡、国民の健康や幸せ	<b>海上渡御</b> 、文化5年以降 <b>權伝馬船のお供船</b> 、權伝馬踊り、ホーランエンヤの唄	慶安元年、天候不順で凶作が予想され、松江・松平家初代藩主松平直政公が、阿太加夜神社の神主松岡兵庫頭に命じ、城山稲荷神社の御神霊を阿太加夜神社へ船でお運びし、長期にわたり五穀豊穡を祈願させた。	B
礼文島巖島神社例大祭	毎年7月14日～16日	北海道礼文町	巖島神社 ( <b>市杵島姫命</b> /コトシロヌシ/三吉大神)	<b>大漁祈願</b> 、町の繁栄	神輿渡御、四ヶ散米舞行列、沖上げ音頭の掛け声で神輿を宙に放る	文化5年宗谷場所の請負人が松前福山から海産繁殖捕魚円満祈願のため祭神市杵島姫命を奉遷したのが神社の創祀。祭りの起源は不明。	C
土崎神明社祭の曳山行事	毎年7月第3土日	秋田県秋田市	土崎神明社 (アマテラスオオミカミ)	怨霊悪霊退散、町の発展	神輿渡御、曳山巡行、秋田音頭、港ばやし、音頭上げ	宝永元年に、土崎の港に来る船乗りの人たちから神輿が寄進された。	海の道
姥神大神宮渡御祭	毎年8月9日～11日	北海道江差町	姥神大神宮 (アマテラスオオミカミ/ <b>住吉三神</b> /春日大神)	豊作、 <b>豊漁</b> 、無業息災	山車の供奉巡行、神輿渡御	瓶子の水を海中に注ぎ、ニシンの群来により人々を飢えと寒さから救った姥神の祠を、正保元年に津花の地から現在地に遷宮した頃から行われたと考えられている。	C
琴浦精霊船行事	毎年8月13日、16日	新潟県佐渡市	祖霊信仰 (お盆行事)	先祖供養、太平洋戦争犠牲者の慰霊、新仏無縁仏の供養	<b>精霊船と共に人が海を泳いで</b> 先祖を送迎する	不明だが、江戸時代に小木村からスケトの村として独立し、漁村として全体が一体となり生きていかなければならない必要性が、元来家の行事である盆行事が、宗旨・同族関係を越えた行事になったのではないかという説がある。	A
黒島天領祭	毎年8月17日、18日	石川県輪島市	若宮八幡神社 (仁徳天皇/ <b>金刀比羅神</b> / <b>夷神</b> :エビス)	<b>海上安全</b> 、五穀豊穡	曳山 (山車) 巡行、子供の奴振り行列、獅子舞、八千代栄節の輪踊り	不明 (昔は黒島祇園祭と呼ばれており、昭和30年頃に天領祭と名付けられた)	C
坂越の船祭り (瀬戸内三大船祭り)	毎年10月第二土日	兵庫県赤穂市	大避神社 (秦河勝/アマテラスオオミカミ/春日大神)	不明 (大避神社は航海安全や災難避けの御利益がある)	<b>伝統的和船による海上渡御</b> 、バタ板の橋架け、 <b>權伝馬</b>	江戸時代初期、御祭神・秦河勝が坂越に渡来した伝承を再現するお祭りとして始まった。	B
三谷祭	毎年10月第三又は第四土日	愛知県蒲郡市	八劔神社 (ヤマトタケル)、若宮神社 (応神天皇)	不明 (神様の逢瀬の祭り)	山車の曳きまわし、 <b>海中渡御</b> 、伝統芸能	八劔のヤマトタケルが若宮神社へ渡御したという夢を見た庄屋が、神のお告げとして神輿を設え儀式を行った。	B

## 日本三大船祭

※日本三大船神事とも呼ばれる

### 天神祭

大阪府大阪市



©大阪天満宮

25日本宮の船渡御

6月下旬吉日～7月25日の約1か月間開催され、日本三大祭にも歌われる大阪天満宮の祭り。25日本宮の夜は、大川に多くの船が行き交う船渡御が行われ、奉納花火があがる。天曆5年（951年）、社頭の浜から神針を流し、流れ着いた浜に齋場を設け、禊祓を執り行なった際に神領民が船を仕立てて奉迎したのが始まりとされ、1000年以上の歴史がある。

### 宮島管弦祭

広島県廿日市市



©旅やか広島

平安絵巻のような管弦船

宮島の厳島神社で旧暦6月17日に行なわれる海上渡御の祭り。船神事であることから、潮の干満を考慮し大潮の日に調整しておこわれ、満月の灯りに照らされながら本殿に還ってくる管絃船の風雅な姿は真夏の瀬戸の海を舞台に繰り広げられた一大平安絵巻を思わせる。平安貴族たちが邸内の池や川に船を浮かべて管絃を奏していたのを、平清盛が宗像三女神を祀るために厳島神社に移したのが始まりとされる。

### 貴船まつり

神奈川県真鶴町



©2017 Manazuru Town

海上渡御の様子

毎年7月に行われる貴船神社の例祭。鹿島踊りや花山車の奉納の他、船に乗せた神輿が海上を渡る行事で知られており、大漁や無病息災を祈願する、真鶴の伝統的な海の祭。江戸時代の17世紀中頃に始まったのではと伝えられており、当時は、船の操舵や進水、力くらべなどを競い合い、腕を磨きあったとも考えられており、現在も勇壮な光景を見ることが出来る。国指定重要無形民俗文化財。

日本三大船祭には諸説あり、天神祭・宮島管弦祭と並び島根県松江市の

「ホーランエンヤ」



宮島管弦祭・貴船まつりと並び、宮城県塩竈市の

「塩竈みなと祭り」



©塩竈市観光物産協会

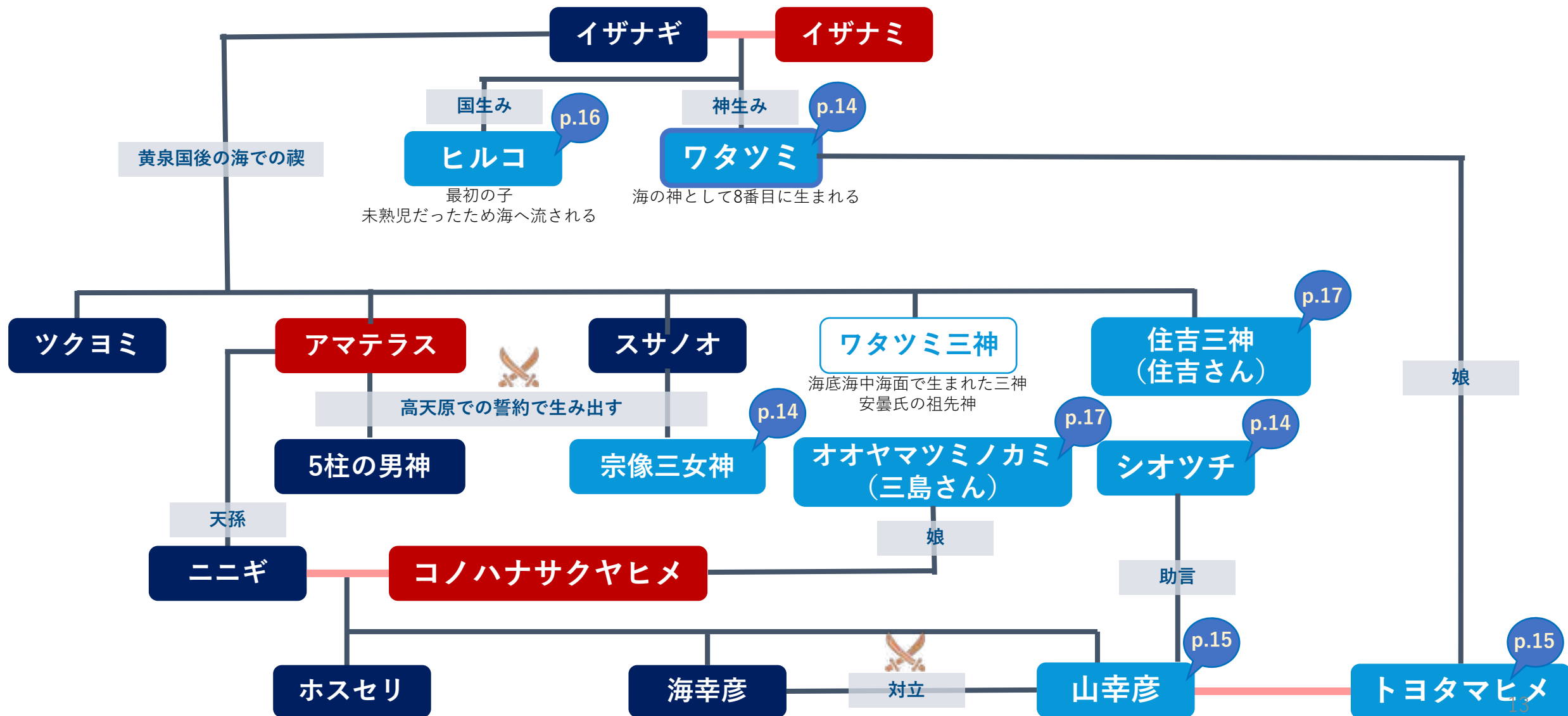
を日本三大船祭とする説もある。

また、天神祭・宮島管弦祭・坂越の船祭りを瀬戸内海三大船祭と呼ぶ。



# 海の神とは（記紀の神—相関図—）

神々の始まりである『古事記』『日本書紀』に登場する海の神。多くの神社で祀られ、海の祭と縁深い神様が多い。



## 綿津見(ワタツミ)

別称：海神/大綿津見神/少童命など

### 海の神

物語：イザナギとイザナミから生まれた8番目の神で、日本神話の中で**最初に登場する海の神**。名前の「綿」は海を表し、大海原をはじめとした全ての水を司る。海幸山幸の物語にトヨタマヒメの父として登場する（P.15）。ワタツミ三神とは別神であるが、地域により同一神とされている場所もある。

ご利益：海上安全、豊漁

神社：綿津見神社、海神社、穂高神社

祭：釜石まつり、海神社例祭

### 海の神/航海の神

物語：挨拶へ来たスサノオノミコトが高天原を奪いに来たと思う姉アマテラスオオミカミ。どちらが正しいか互いの物を口に含み神々を生じさせる誓約を行った際に、スサノオの剣からアマテラスオオミカミがこの三女神を生み出した。地上に降りた女神達は宗像大社をはじめ**海上交通の要所に祀られ**、氏族宗像氏ら海人族が崇拝していた神とされている。

ご利益：交通（航海）安全、豊漁、商売繁盛、芸能上達

神社：巖島神社、宗像大社、佐島の八幡神社

祭：宮島管弦祭、宗像大社秋季例大祭（みあれ祭）、佐島の秋祭り

## 宗像三女神

市付島比売命/多岐都比売命/多紀理毘売命

©八百万の神大図鑑

## 塩椎(シオツチ)

別称：塩竈さん/塩土老翁神など

©日本の神様と神社

### 海の神/呪術予言の神/塩の神

物語：記紀におけるシオツチは、登場人物の道標の役割をもっている。海幸山幸の物語(P.15)では、山幸彦が兄の海幸彦から借りた釣り針を失くし海辺で悲観にくれているところに現れ、竹の船に乗り海神ワタツミの宮殿へ行くよう助言した。また、高天原から地上へ降りたタケミカヅチとフツヌシの諸国平定も先導している。鹽竈に地に来た後はそこへ留まり、**漁業や煮塩の製造法を伝えた**とされる。

ご利益：漁業/農業/製塩の産業発展、海上安全、延命寿命、安産守護

神社：鹽竈神社、青島神社、胡宮神社

祭：塩竈みなど祭り

## まるで浦島太郎伝説—『海幸山幸物語』—

### 山幸彦

別称：火遠理命/ホオリノミコト  
豊漁の神

物語：ニニギとコノハナサクヤヒメの息子。狩猟が得意で山幸彦と呼ばれた。ワタツミの加護を得てから**海の神の神格**も得た。

ご利益：豊漁、五穀豊穰、勝運招来

神社：粟鹿神社、若狭彦神社、鹿児島神宮

祭：瓶子渡（粟鹿神社例大祭）



山幸彦（猟師）には海幸彦（漁師）という兄がいた。ある日山幸彦は兄から借りた釣針を海中で失くしてしまう。代わりに釣針と共に謝罪するが

俺の釣針を返せ！

海幸彦

途方に暮れ海岸で泣く山幸彦。

そこへ通りかかった知恵深い老神シオツチが助言をする。

海神ワタツミの宮殿へいきなさい。

シオツチ

宮殿に着いた山幸彦はワタツミの娘トヨタマヒメと恋に落ち結婚。

3年後、例の釣針や故郷が山幸彦の心に去来。ワタツミが山幸彦のために赤鯛の喉に刺さった釣針を探し出し、山幸彦へ返した。

海幸彦に負けないよう助言と贈り物を授けよう。

ワタツミ

山幸彦はワタツミの助言と贈り物をもらい地上へと帰る。

助言通りに行動した山幸彦はワタツミの加護により兄海幸彦に勝利する。元々山の神だった山幸彦は、これ以降「**山と海両方の神**」となった。

山幸彦の子を身ごもっていたトヨタマヒメは地上へとやって来る。

出産の時はわたしの姿を見ないでくださいね。

山幸彦が気になって覗くと、ワニ（鮫）がのたうち回っていた。

本当の姿を見られたトヨタマヒメは赤子を残し**海へと帰ってしまった**。

### 豊玉比売

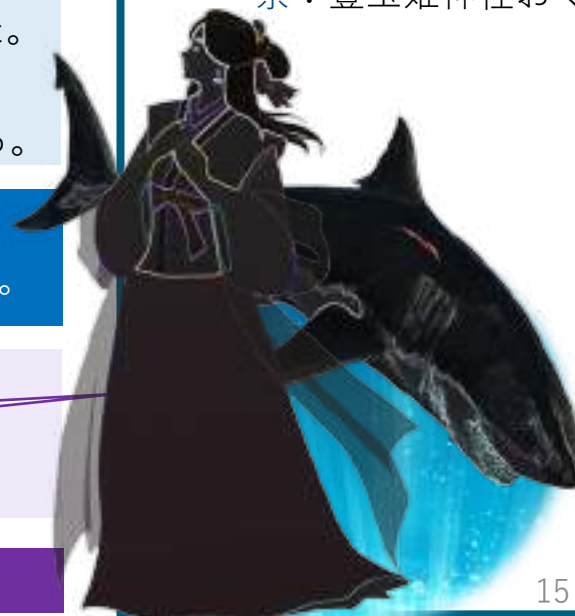
トヨタマヒメ  
水の神/福の神

物語：海神ワタツミの娘で**乙姫**のモデルと言われる。美しい女性だが本来の姿はワニ（鮫）だった。

ご利益：航海安全、五穀豊穰

神社：鵜戸神宮、豊玉姫神社

祭：豊玉姫神社おくんち



# 海の神とは（民間信仰の神1—恵比寿信仰—）



恵比寿や弁天など記紀に登場しない神々は、神仏習合で日本古来の神と仏や他国の神々と習合され生み出された。奈良時代に起源を持ち、民間信仰を通じて広く信仰されるようになった。

## コトシロヌシ

海の神/商業の神/託宣神

物語：父オオクニヌシからアマテラスへ国譲りを進言した託宣の神。その後海上で船を揺すりながら「天の逆手」を打って青柴垣を作りそこに隠れ去った。海の彼方の常世からくる精霊を迎え神意を伺う神事と考えられている。**恵比寿が釣り竿を持つ姿はコトシロヌシが釣りをしていた事に由来。**

ご利益：商売繁盛、開運、厄除け、福德円満、病気平癒



物語：イザナギとイザナミが最初に生んだ子とされる神で、その身体に骨がなかったため葦の船乗せられ海に流されてしまう。

その後摂津国（兵庫と大阪の境）の西宮に流れ着き、漁師に拾われて以来、**外来の神を意味する「夷（えびす）」**となったと伝えられている。

ご利益：海上安全、豊漁、商売繁盛

神社：西宮神社、石津太神社、八坂神社（蛭子社）

祭：蛭子社祭

神社：下鴨神社、美保神社、三嶋神社

祭：諸手船神事、須賀のまつり

えびす

## 恵比寿

3柱の神に起源のある招福の神



物語：オオクニヌシが国づくりに頭を悩ませていた時に海上から現れた小さな神で、医療や薬事を司り穀物とも深い関係を持つ。一寸法師やかぐや姫の「小さ子」の伝承の原型とされる。

ご利益：病難排除/国土安寧/縁結び/安産育児/漁業航海守護/産業開発

神社：酒列磯前神社、少彦名神社、神田明神社

祭：神農祭、酒列磯前神社例祭

## 蛭子(ヒルコ)

漁業の神/福の神

薬の神/酒造の神/穀物神/温泉神

## スクナビコナ

蛭子/コトシロヌシ/スクナビコナは、海からやって来て富や福をもたらす「客人神」である

## 弁天さん

金運の神/幸運の神

ヒンドゥー教の女神サラスヴァティが仏教に取り入れられ弁財天となり、日本の神「宗像三女神」の市付島比売命が神仏習合し宗像/巖島信仰が弁天信仰と重複しながら広がった。





## 大山祇神社例大祭（愛媛県今治市）

大山祇神社が遷座された日を起源とし、正装した神職や氏子らが拝殿に向かって行列する。多くの露店で賑わいをみせる。



© 2016 - 2019 - Operated by TORAMEGA inc.

物語：全国で目にする三島神社は、大山祇神社の御祭神オオヤマツミノカミを勧請したもので、「三島」の名は大山祇神社の所在地である愛媛県大三島町に由来する。

日本の山の神の総元締めとして知られるが、「ワタシノオオカミ」という別名を持ち、海の神の神格も持つ。総本山の大山祇神社は瀬戸内海の島に鎮座し、**瀬戸内水軍の守護神**として崇拝されてきた。娘のコノハナサクヤヒメは山幸彦の母にあたる。

ご利益：農業守護、鉱業守護、航海安全  
神社：大山祇神社、三嶋大社、森戸大明神  
祭：大山祇神社例大祭

商売繁盛の神/山の神/海の神/酒の神

## 三島さん

別称：大山祇神/オオヤマツミノカミ



©日本神話の世界



©住吉大社 御朱印

## 住吉さん(住吉三神)

表筒男命/中筒男命/底筒男命

航海の神/海の神/和歌の神

物語：住吉さんと呼ばれ民衆に親しまれている住吉三神は、黄泉の国から戻ったイザナギが、海で穢れを清める禊を行った際に生まれた表筒男命（ウワツツノオ）/中筒男命（ナカツツノオ）/底筒男命（ソコツツノオ）の三柱の神である。神功皇后が**新羅出兵の際に海路を守護**し、これに感謝した神功皇后が摂津国住吉に社（住吉大社）を創建した。

ご利益：豊漁、商売繁盛  
神社：住吉大社、住吉神社  
祭：住吉祭（住吉大社例大祭）



©住吉大社HP

## 住吉祭（大阪府大阪市）

大阪の夏祭りを締めくくる住吉祭は、大阪中をお祓いする「お清め」の意義があり、大阪一の神輿渡御と言われている。

# 海の神とは（森羅万象の神）

古来より日本には八百万の神がおりと言われ、物や自然など森羅万象万物に宿るとされてきた。



©ひみずなく

物語：魚群を追うクジラは豊漁を想起させ、浜に漂着したクジラの水死体を、豊漁をもたらす神「えびす」（p.13）と呼んで祀り豊漁祈願をした。その他鯨塚や鯨墓をつくり捕獲したクジラの霊を祀るなど、**捕鯨が盛んだった日本ならではの信仰**と言える。かつて捕鯨が盛んだった長崎県五島列島にある海童神社には、ナガスクジラの顎骨を使った「鯨骨鳥居」がある。

ご利益：海上安全、豊漁

神社：鎮西大社諏訪神社、海童神社

祭：長崎くんち

## クジラえびす

## ふなだま 船霊

物語：漁業に従事する人々が航海安全や豊漁を祈願する**船を守護する女神**。船内の神棚に女性の髪や人形（男女一対になっている地域も多い）をご神体として祀る。不漁が続く際には、縁起を担ぎ船霊を入れ替える事もある。

船霊は女神であるため、船に女性を乗せないようにしている場合も多い。

ご利益：海上安全、豊漁

神社：住吉大社、船玉神社

祭：長瀬船玉まつり



©2021 Maturism All Right Reserved.



©APKPure

物語：龍は古代中国における観念上の霊獣で、日本の龍神信仰は中国の影響を受けている。その基体に水神の表徴である蛇信仰があったとされ、**漁業生産とも深く関わって**おり、広く龍神祭が開催される。金比羅宮の神は、ヒンドゥー教のクンビーラ（女神の乗り物であるワニが神格化した）が仏教に取り入れられ龍神として信仰され、神仏習合で金毘羅権現となった。

ご利益：海上安全、豊漁

神社：金刀比羅宮、金吾龍神社

祭：笠浦龍神祭り、龍神祭

## 龍神

## 地域における海の祭の役割

海の祭の起源から時は進み、現代では地域ごとに元来の目的と異なる機能を果たしている祭も多い

### 地域コミュニティ醸成

地域住民が交流する貴重な場となっており、健康なコミュニティを育て居住継続の意思にもつながる。

祭礼として行う船の競漕や造船、郷土芸能など後継者が減少する中、技術継承できる貴重な場となっている。

### 技術継承

### 信仰

漁師町は特に海への信仰心が残っており、年に一度の祭祀が地域全体の心の拠り所となっている。

祭が貴重な観光資源となり、地域に結びついた産業商業へ良い経済効果を生んでいる。

### 産業商業との結びつき

### 歴史の伝承

祭の起源や変遷がその地域にとって貴重な歴史となっており、祭がその土地の歴史や文化を知る場となっている。

# 海の祭ismプロジェクトの活動の中で分かってきた 海の祭の消滅を招く原因



## 漁業衰退

海の祭は漁師のための海上安全祈願や豊漁祈願が多く、担い手が漁師である事も多い。海洋環境の変化や他国の違法操業で漁業が衰退する事により、そもそも本来の祈願をする意味を失ってしまったり、漁業従事者である漁師の数が減少することで、海の祭の担い手の数が減ってしまう事も予想される。

## 海洋汚染

海の祭は海への信仰や海での祭礼に基づくものである。海水温の変化やマイクロプラスチックの増加などで海洋環境が変わり、漁業やレジャーなど海との関りが変化する事で、信仰心が失われたり、海での祭礼を実施する事が難しくなる事態が想定される。



## 沿岸地域の人口減少

海の祭の慢性的な課題として担い手/後継者不足がある。その根本理由として沿岸地域の少子高齢化や人口流出が挙げられる。立派な船や神輿があっても、それを準備し動かす人間がいなければ祭の存続は困難である。



## 天災

地震に加え世界的に異常気象が増え、毎年天災に見舞われる機会が多くなった。祭の日に天災が起きた場合には中止や縮小開催となり、それが1年でも復活に多大な労力を要するが、2年3年と続いた場合には担い手も疲弊し、祭が縮小したり「終わり」になる可能性が高まる。

## 感染症

新型コロナウイルスのような未曾有の感染症とも共存する時代となり、2020年は約9割の祭が中止となった。大勢の人が密集し大声を出す事の多い祭は、他のイベントや伝統行事と比較しても感染症の影響を受けやすく、この機に祭が縮小したり「終わり」になる可能性が高まる。

# 海の祭の消滅を招く原因—具体的事例—



## イカ釣り漁の衰退で地域の漁師が減少、祭の船が減ってしまう（とも旗まつり/石川県能登町）

漁業衰退

昔からイカ漁で栄えてきた能登町小木で海上安全と豊漁を願いとも旗を掲げ船で巡航する祭だが、伝馬船（とも旗を曳く船）が将来的に減ってしまうと言われている。近年北朝鮮や中国の違法操業（漁法も持続的なものではない）により漁がまともにできない状態が続いている事も影響しイカ漁の後継者が減ってきている。現在伝馬船を持っている人はイカ漁を引退した高齢の人が多く、漁業の衰退が祭の衰退（必要な伝馬船の減少）を招くと言える。また、イカ漁に出る父を想う子の願いがこの祭の起源であり、切っても切り離せない関係である。

## 海洋汚染が子供の海ばなれを生み、祭が変わってしまう（琴浦精霊船行事/新潟県佐渡市）

海洋汚染

毎年8月に、藁の船で海を渡りご先祖の精霊を送迎する佐渡琴浦地区の盆行事。昔は迎え盆に多くの子供達が祭に参加し、藁の船と共に海を泳ぐことで、一緒にご先祖様と帰ってくるという大切な部分を担っていた。しかし、透明度も高く魚影も濃かった琴浦の海が現在では変わってしまい、子供達は目の前の海で泳がずプールへ行って泳ぐという。祭の日にも海には入らなくなってしまった。海に入る事が重要な祭にとっては、海洋汚染は無視できない問題となっている。

## 島の人口が減り担い手も減少、近隣の島民の力なくして担ぎ上げられない（佐島の秋祭り/愛媛県上島町）

人口減少

瀬戸内海に位置する愛媛県佐島は人口500人ほどの島。造船業の最盛期には1000人の人口があり子供も多くいたため、佐島の秋祭りでは神輿/だんじりの棒に溢れるように人が集まり、子供による奴行列や出店もあり大変賑わっていた。近年は人口減少に伴い奴行列や出店はなくなり、島民だけでのだんじり2基の運行も厳しくなっている。それでも神社の石段を担ぎ上げる際には、近隣の島々から助っ人が集まり、彼らの助けによりなんとか運行している。

## 天災と感染症で2年連続曳舟祭が中止、地域内外のつながりが切れてしまう（釜石まつり/岩手県釜石市）

天災/感染症

2019年は台風19号と大雨、2020年は新型コロナウイルスの影響で釜石まつり1日目の曳舟まつりが中止となってしまった。元々神輿の担ぎ手不足に悩んでいた担い手は、努力を重ね地域内外の人々のつながりを持ちなんとか運行していた。しかし、年に1度の祭が一度でも中止になってしまうだけで、祭で繋がっていた関係は薄れてしまう。継続的な開催も既に労力が必要な状態で、1年、2年と間が空き、また復活となった時には更に力を必要とする。不確実な要素である天災や感染症は、担い手の祭へ懸ける想いを容赦なく削り取っていくのではないだろうか。

海の祭と関わる中で分かってきた

## 「海の祭の価値」 「海の祭の課題」

を明らかにするため、調査を実施



2019年度『祭の実態調査』

調査1

全国10万人調査

対象者：全国16歳~79歳の男女

調査2

対象者：祭り担い手・運営側1000名調査

追加調査

対象者：調査110万人の中で海の祭に行った方16301名



2020年度『コロナ禍における海の祭の実態調査』

調査

全国800人調査

対象者：全国20代~60代の男女

400人が代表的な海の祭のある地域に居住

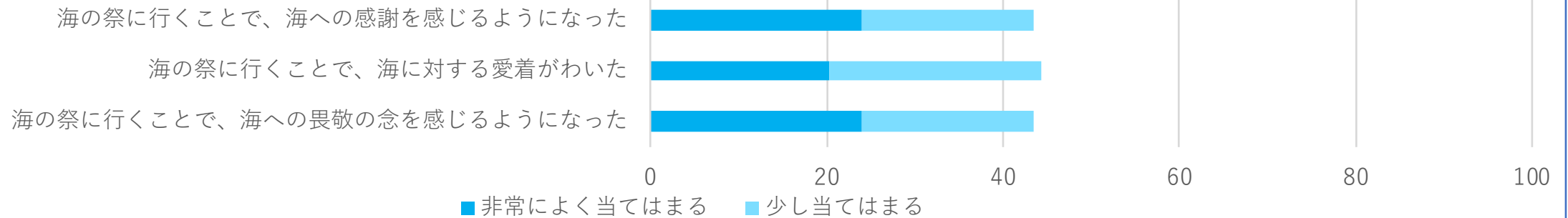
296人が沿岸部に居住

2019年度海の祭ismプロジェクト「祭の実態調査」より、海の祭に参加している方の回答

## 海への感謝・畏敬の念

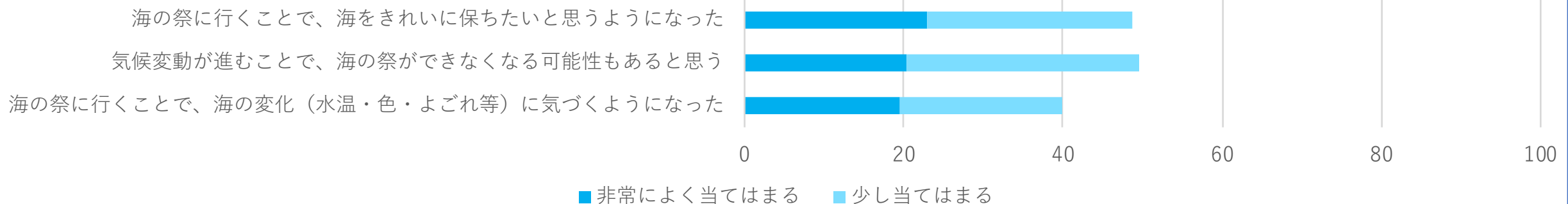
海の祭に参加することで海へ感謝するようになった人約43%

海の祭に参加することで海に畏敬の念を持つようになった人約43%



## 海洋環境保全意識

海の祭に参加することで海をきれいに保ちたいと思った人約49%



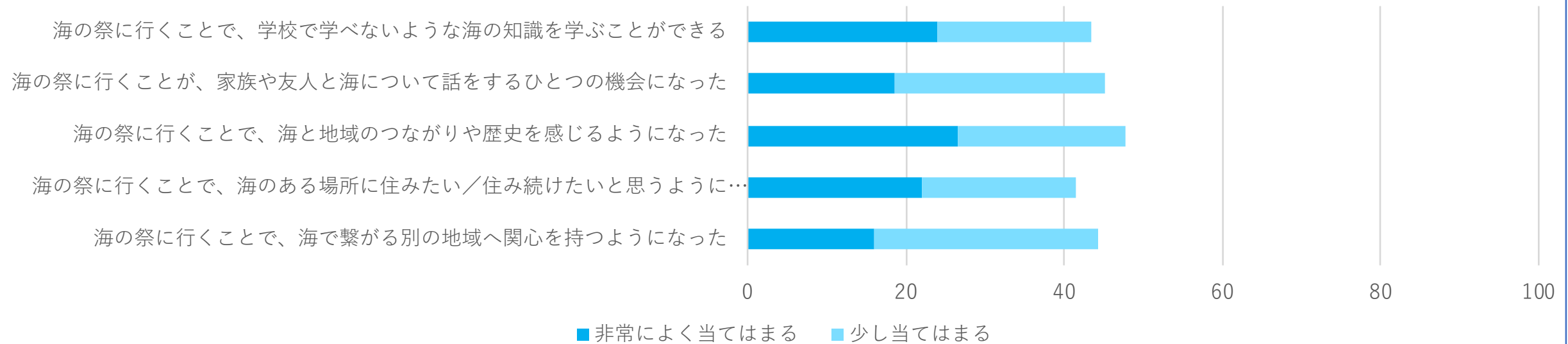
2019年度海の祭ismプロジェクト「祭の実態調査」より、海の祭に参加している方の回答

## 海への関心・海を知る機会

海の祭で学校で学べないような海の知識を学習できると思った人約43%

海の祭に行くことで、海と地域のつながりや歴史を感じるようになった人約48%

海の祭に参加して海のある地域に住みたい（住み続けたい）と思うようになった人約42%



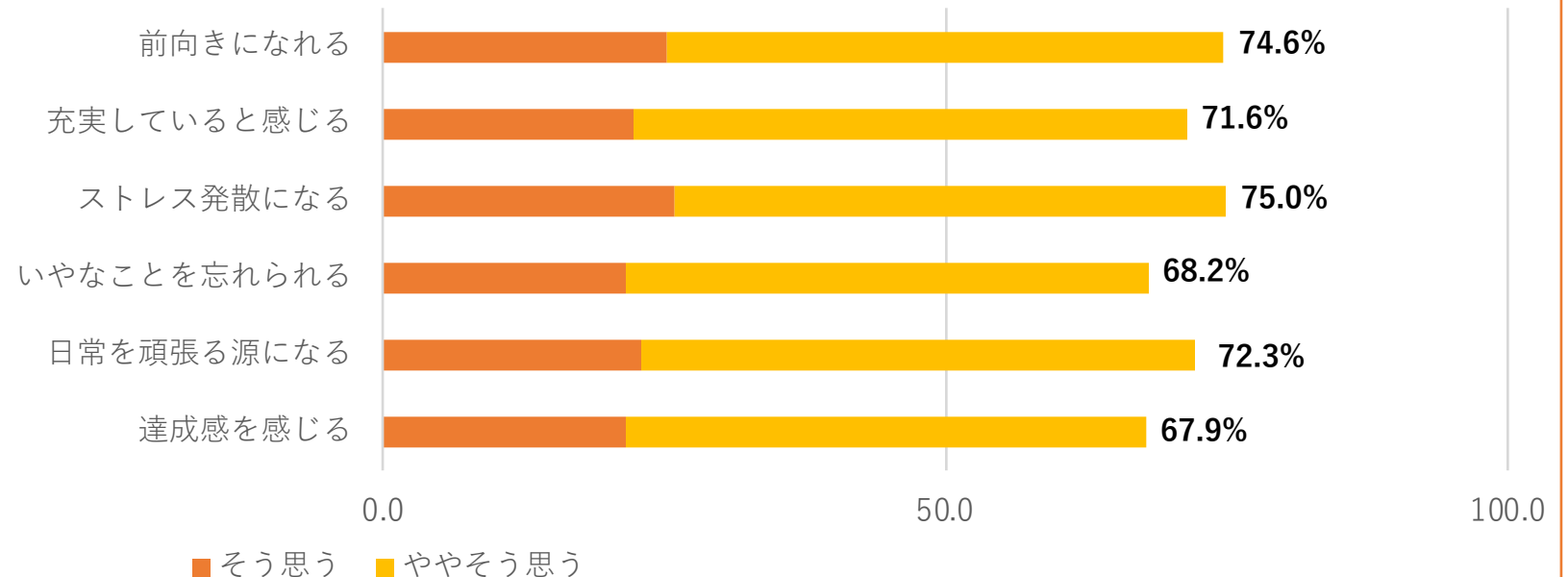


2020年度海の祭ismプロジェクト「コロナ禍における海の祭の実態調査」より  
祭に参加することで感じる事として回答されたもの  
※沿岸部居住者（800人中296人）の回答を海の祭に対する回答と仮定する

## 個人のモチベーション・心の健康

祭に参加することで、前向きになれると感じている人約75%

祭に参加することが、日常を頑張る源になると感じている人約72%

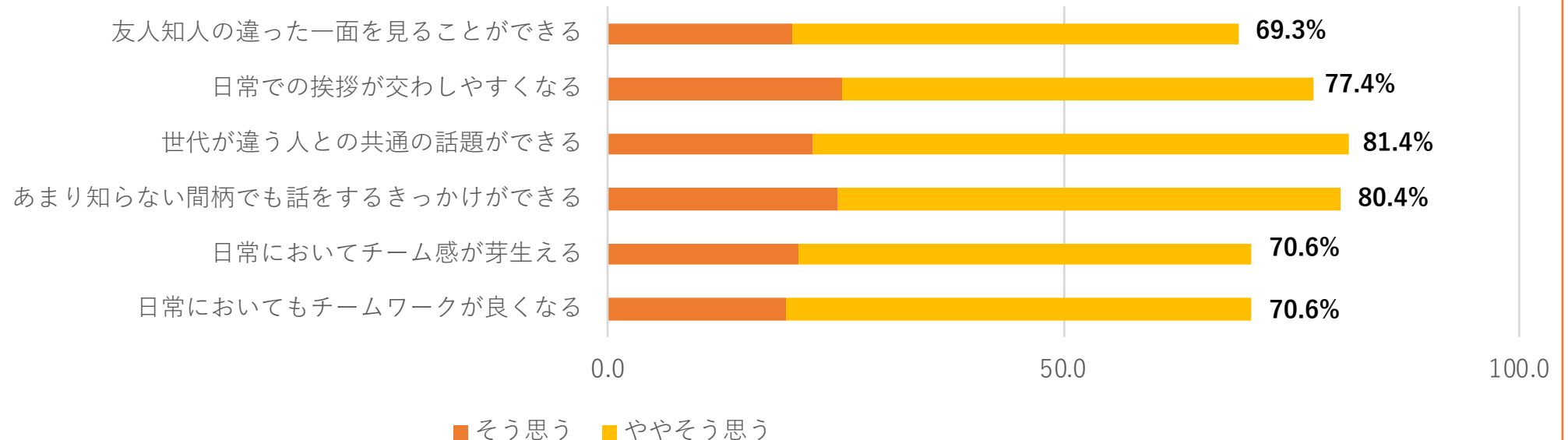


2020年度海の祭ismプロジェクト「コロナ禍における海の祭の実態調査」より  
一緒に祭に参加した友人知人との関係性の変化について回答されたもの  
※沿岸部居住者（800人中296人）の回答を海の祭に対する回答と仮定する

## 組織文化・チームビルディング

祭と一緒に参加すると、世代が違う人達との共通の話題ができると思っている人約81%

祭と一緒に参加すると、日常でもチームワークが良くなると感じている人約71%

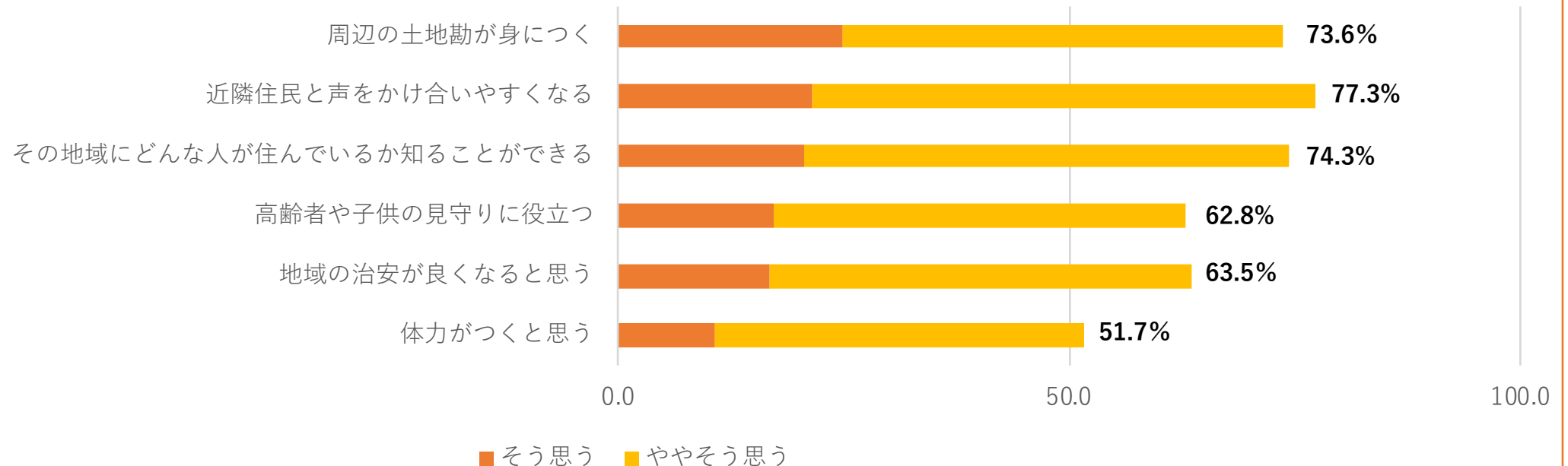


2020年度海の祭ismプロジェクト「コロナ禍における海の祭の実態調査」より  
祭に参加することで得られる、もしくは得られそうなこととして回答されたもの  
※沿岸部居住者（800人中296人）の回答を海の祭に対する回答と仮定する

## 地域コミュニティの醸成・防災

祭に参加することで、周辺の土地勘が身につくと思った人約74%

祭に参加することで、近隣住民同士声をかけ合いやすくなると思った人約77%

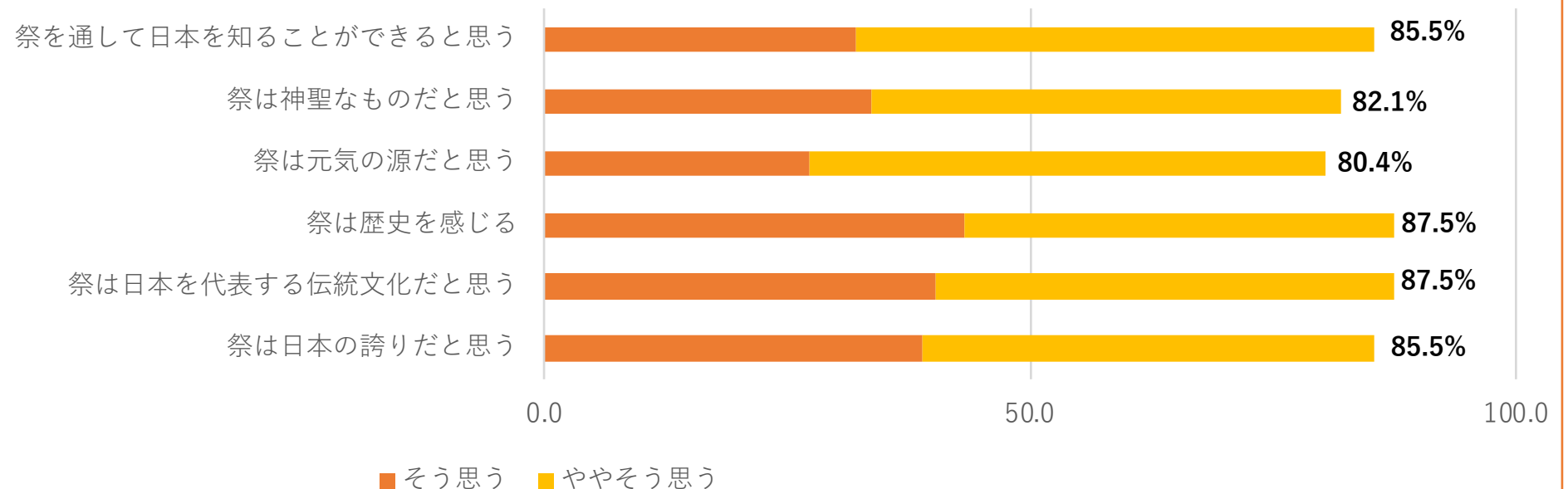


2020年度海の祭ismプロジェクト「コロナ禍における海の祭の実態調査」より  
祭に対して思うこととして回答されたもの  
※沿岸部居住者（800人中296人）の回答を海の祭に対する回答と仮定する

## 文化的価値・日本人の誇り

祭を通して日本を知ることができると思う人約86%

祭は日本を代表する伝統文化だと思う人約88%



## 海への感謝/畏敬の念

海の祭には海上安全や豊漁を神へ願う海への信仰心を大切にしているものが多く、海と共存し命を与えられ奪われてきた両側面の海を知る「日本人と海の記録」と言っても過言ではない。海の祭を通して、海への感謝/畏怖/敬意は次世代へと継承されている。

## 海を知る機会/環境保全意識

海の祭には漁業関係者も多く参加し、地域住民に加え帰省する人々が一堂に会する場でもある。年に一度同じ場所（海）で開催されることで、定点観測のように海の観察ができ、多様な人々が海について話し、子供達にその地域の海を知ってもらう貴重な機会となる。

## 生きがい/楽しみ

祭は社会的ヒエラルキーが崩れる年に一度の機会でもあり、日常がうまくいかなくても祭で輝ける人も多い。それを楽しみに日常を頑張る事ができる。特に漁師においては、職業柄海への信仰儀礼を大切にすることが多く、祭がある事で1年の仕事や日常生活を安心して頑張る事ができる。

## 健全な地域コミュニティ

学校、職場や習い事と異なり、祭は地域の多種多様な人々が一堂に会し、共通の目的のため交流を通じてそれぞれの役割を全うする貴重な場である。子供は親や教師以外に怒られ学び絶好の教育の場となり、大人は子供達を見守り指導しながらチームが一体となって動けるよう助け合う。それは祭以外の日にも波及し地域が人を育て孤立を無視しない共助の地域を育てると考えられる。

## 防災訓練の機会

海の祭の中心である神社や寺は、過去津波の被害に遭い安全な場所へ移転した社も多く、高台や浸水域の境界に建立されているため避難所として機能する。また、祭は地域の施設利用や経路の把握、地域住民の役割分担や声かけ等防災訓練の絶好の機会と言える。また、地域の人々との交流が年に一度あるだけで近隣の住人を認知でき、災害時にお互い声を掛け合い誰も取り残さない意識を育てられる。

## 日本人のアイデンティティ

古来より日本人は祭を通して、八百万の神、文化、自然、生物、先人達を敬い感謝をして受け容れてきた。その信仰が他者や自然への思いやりを育て、日本人が大切にしてきたものへ敬意を払い大切にしていける事ができる。また、祭礼中に助け合う事も多く、共助の精神を養う事もできる。

## 海との結びつきを感じない

津波による被害を目にした時、海で遊び海産物を食べた時。その「海」は切り離して考えられ、楽しい海は好きで怖い海は嫌いという思考になる。海産物の先の漁師、その先の海まで想像できず感謝と畏怖両側面を持った海との結びつきを感じなくなる。

## 海の変化を気にしない

実際に海に触れるのは自分が好んで行く楽しい海。海の祭で漁師さんに話を聴いたり定期的に海について人と話す機会がなくなり、海が抱えている課題は全てメディアを通して知る事となる。海洋汚染も海水温上昇や乱獲による不漁も他人事でしかなくなる。

## 寂寥感/孤独/不安

日常がうまくいかない中で楽しみにしていた年に一度の発散や主役になれる場がなくなる人、帰省者も含め祭で人と繋がっていた機会がなくなってしまう人、年に一度の祭祀ができず漁に出る時に不安を感じてしまう漁師。人々の活力が失われ人との繋がりも薄れ、地域の元気がなくなってしまう。

## 近くの他人は他人

自分の属する組織との交流しかなくなり、多種多様な人々と定期的に関わる機会がなくなり自身の価値観の中だけで生きていく。祭があったら関わっていた人々もただの他人となり、挨拶など日常の交流も薄れ関心を持たなくなる。自身も含め弱者（孤立/高齢/子供など）を取り残し共助を忘れ公助に頼る地域となってしまう。

## 災害弱者の増加

避難所も避難所への経路もスマホで調べないと分からない。地域にどんな人が住んでいるか分からない。施設で炊き出し用の備品が分からない。自身だけでは正しい判断ができず逃げるべきかも分からない時に誰にも訊けない。避難所で助け合いたいけど誰がどの役割で動くべきか分からない。このような災害弱者が増え、その状況の把握も難しくなるため手を差し伸べることもできないような共助の成り立たない地域となってしまう。

## 文化/歴史を大切にしない

文化/歴史に関心を持たず大切にすることを忘れ、物語を継承する側も継承していく側も減少していく。「別の土地へ移住したが、隣の神社の御神木が自宅庭へ落葉するので切ってほしい。」「通勤途中の海岸に、海戦で戦死した兵士の慰霊碑が立っており、戦争の歴史を伝える事は大切でとても良いと思うが、邪魔だから撤去してほしい。」など、想像力が欠如し、自分本位で物事を考える人が増加する。

2019年度と2020年度の調査により、日本人にとって「海の祭」は

- ①海を正しく畏れ、敬い、感謝をする心を育て
- ②環境保全意識を高め
- ③心の元気の源となり
- ④誰も取り残さない温かな地域コミュニティを育て
- ⑤その土地特有の災害における防災訓練の機会を創出し
- ⑥歴史や文化芸能の伝承の場となる

以上6つの価値があることが明らかとなり  
人々が健やかで豊かに暮らしていくために「海の祭は必要不可欠」であることが分かった

海洋国家日本で生きる私たちにとって価値ある「海の祭」

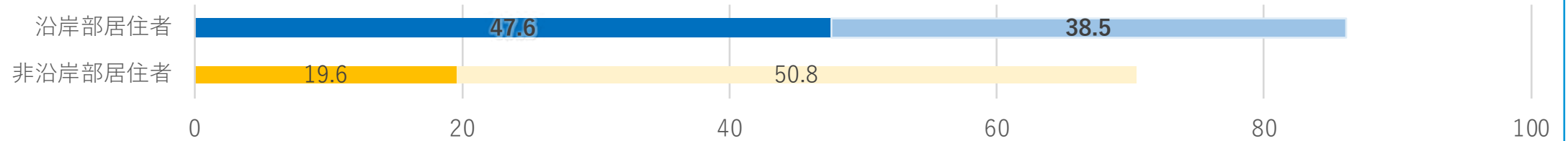
より「海」と密接に関わる沿岸地域で暮らす人々にとって「祭」とはどのようなものか

次項では沿岸部居住者と非沿岸部居住者の回答を比較し  
海と生きる人々と祭の関係を紐解いていく

2020年度海の祭ismプロジェクト「コロナ禍における海の祭の実態調査」より  
沿岸部居住者（800人中296人）と非沿岸部居住者（800人中504人）の回答を比較

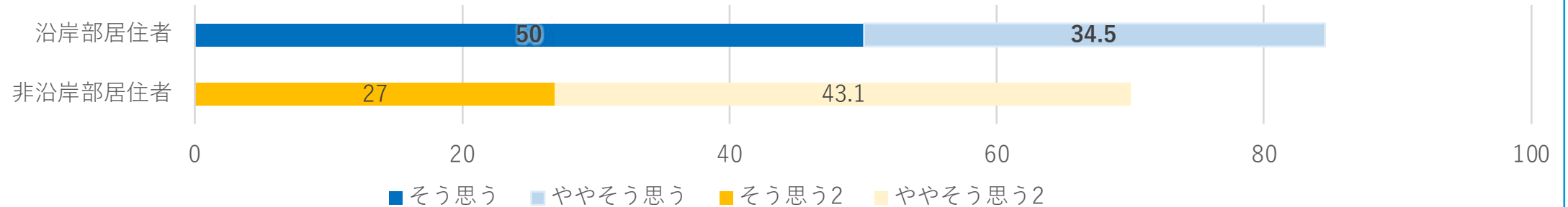
## 海の祭を日本に残したいと思いますか？

「そう思う」と答えた人は、非沿岸部居住者の約2.5倍



## 祭はなくなっではいけないものだと思いますか？

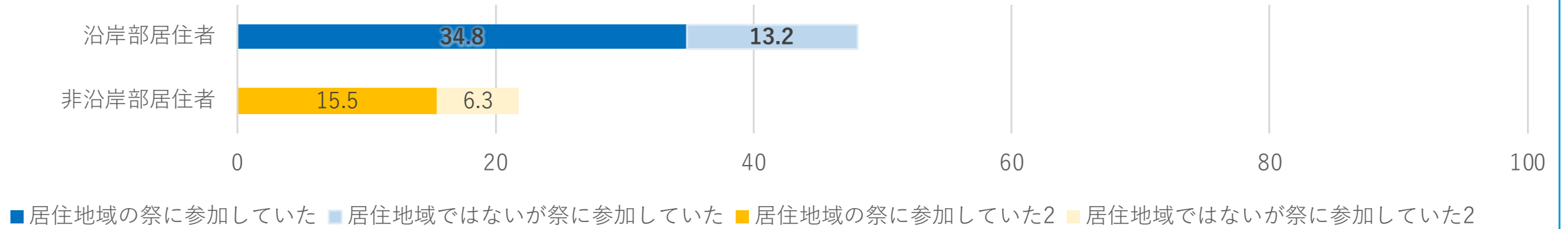
「そう思う」と答えた人は、非沿岸部居住者の約2倍





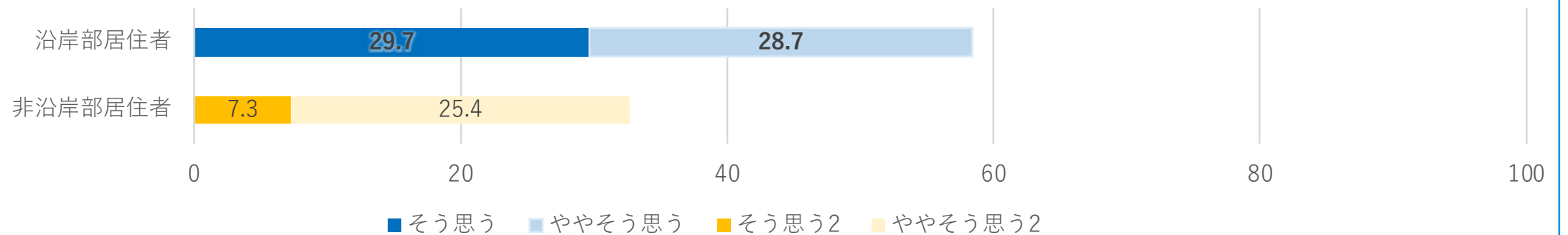
## 新型コロナウイルス流行前に祭に参加していましたか？

祭に参加していた人は、非沿岸部居住者の約2倍



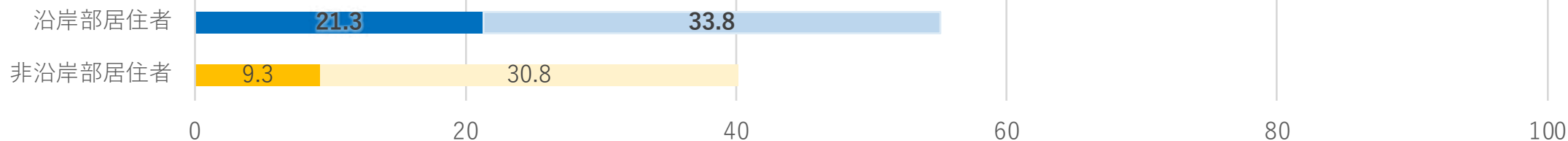
## 海の祭に参加したいと思えますか？

「そう思う」と答えた人は、非沿岸部居住者の約4倍



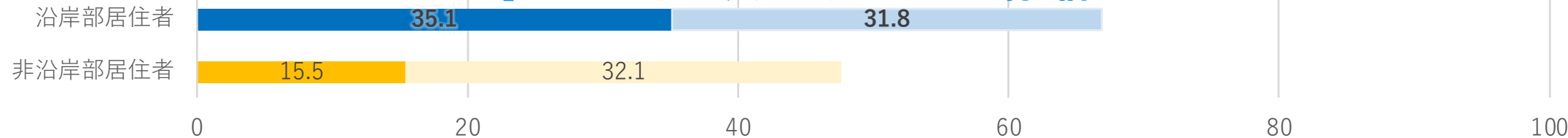
## 祭が開催できれば新型コロナウイルスに打ち勝ったと言えると思いますか？

祭をコロナ明けのシンボルと明確に思っている人が、非沿岸部居住者の**約2倍**



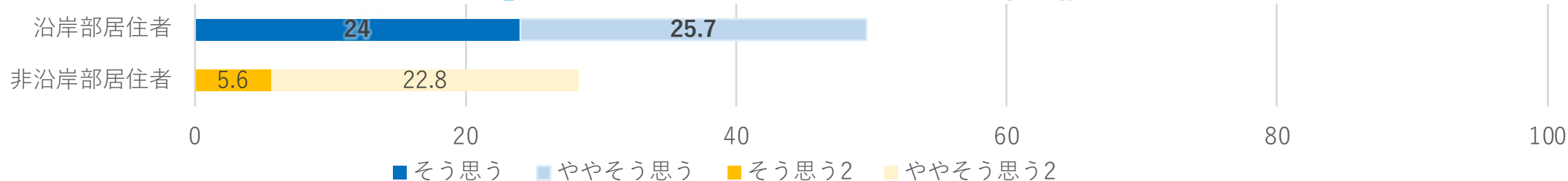
## 新型コロナウイルス終息後に開催される祭に参加したいと思いますか？

「そう思う」と答えた人は、非沿岸部居住者の**約2倍**



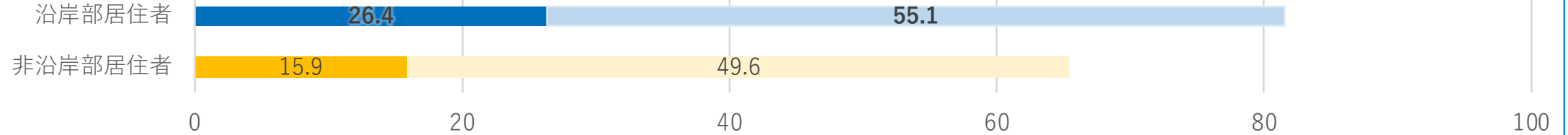
## コロナ禍の自粛期間を経て、以前よりも祭に参加したくなりましたか？

「そう思う」と答えた人は、非沿岸部居住者の**約4倍**



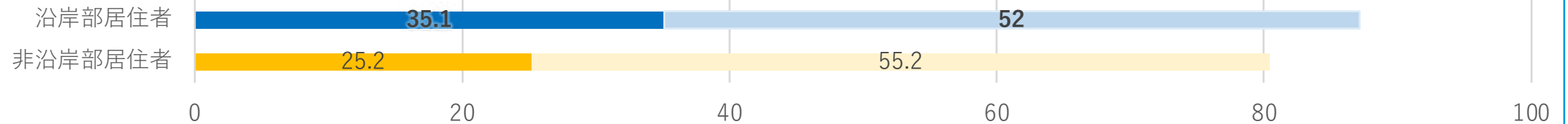
## 祭に参加することで、自分の住んでいる場所が好きになりますか？

祭に参加すると住んでいる地域が好きになると思う人は、非沿岸部居住者の約1.5倍



## 祭に参加することが、地域の伝統・文化を知る機会になりますか？

祭が地域の伝統や文化を学ぶ機会になると思う人は、非沿岸部居住者より多い



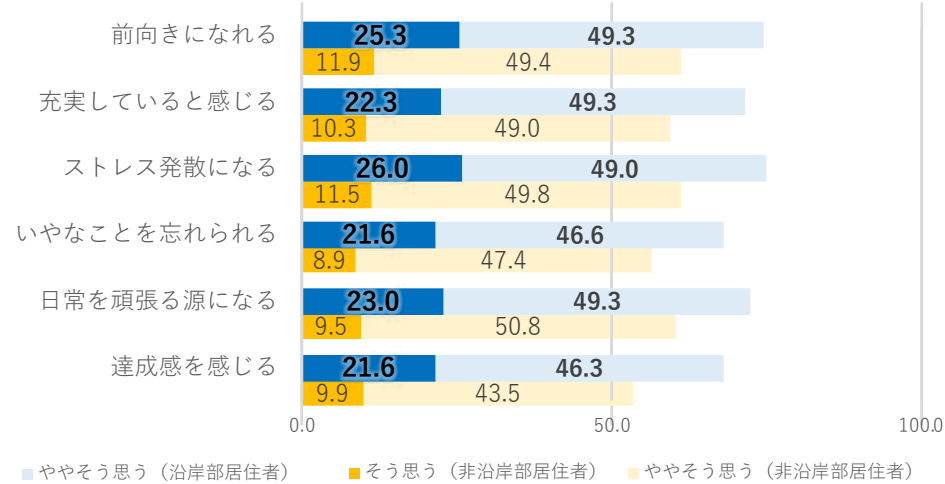
## 祭に参加することで、自然（海/山/森など）を身近に感じると感じますか？

「そう思う」と答えた人は、非沿岸部居住者の約1.5倍

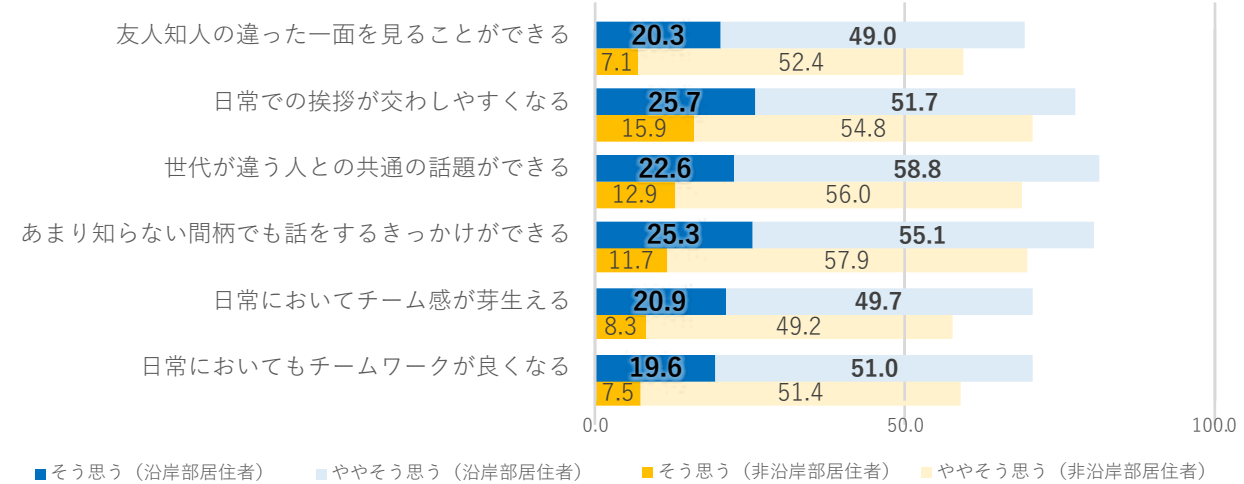


# 調査結果から分かる—海と生きる人にとっての祭—

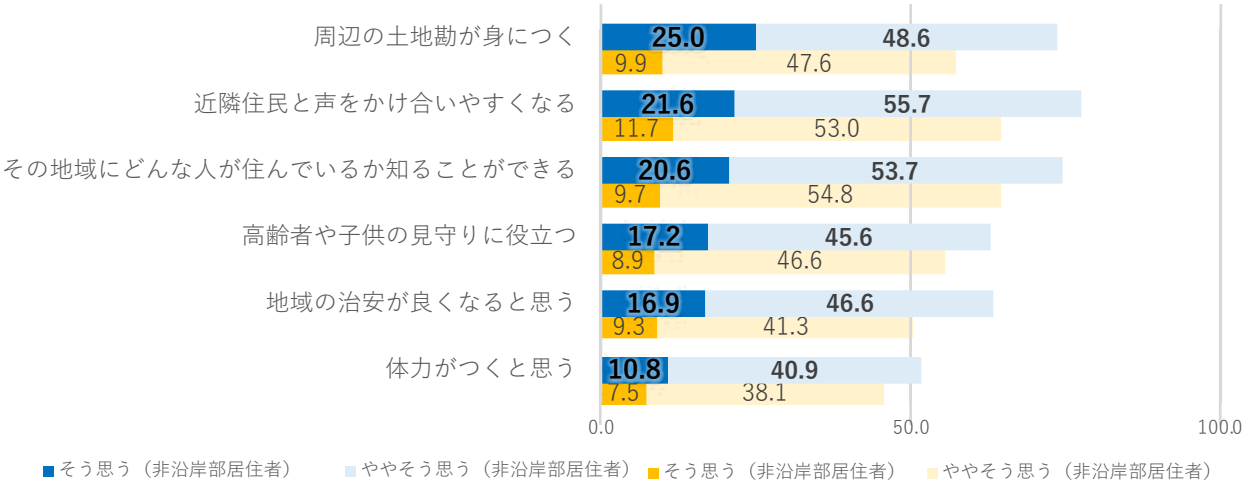
## 個人のモチベーション・心の健康



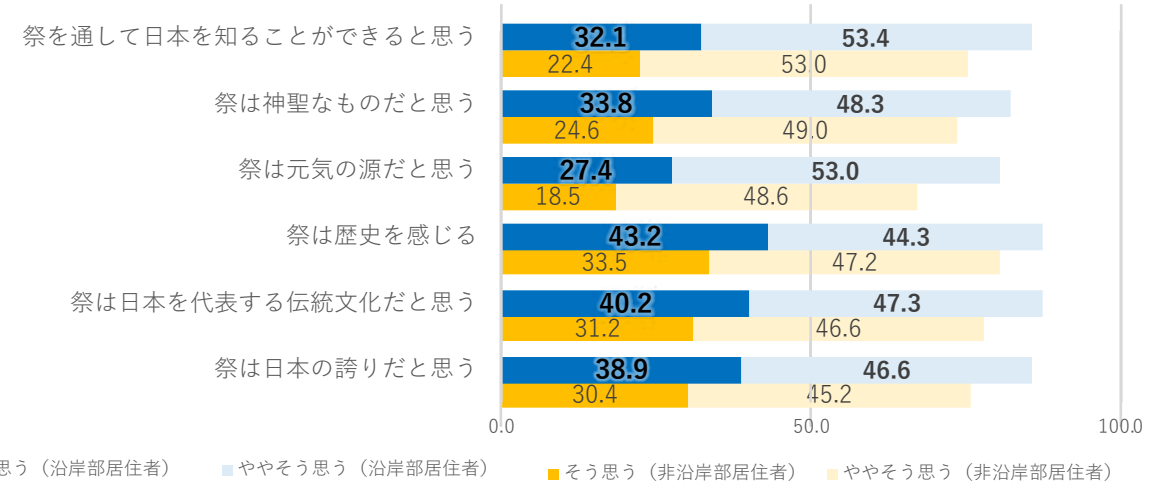
## 組織文化・チームビルディング



## 地域コミュニティの醸成・防災



## 文化的価値・日本人の誇り



## 2020年度調査結果より沿岸地域居住者と非沿岸地域居住者の比較

沿岸地域居住者は非沿岸地域居住者よりも「祭」に対してポジティブな印象を持っており、参加意欲の高さや伝統継承の意思の強さが見られた。特に、日本人が好む傾向の強い「ややそう思う」という選択肢があるにも関わらず「そう思う」と明確な回答をした人が多く、「祭」に対して上辺ではない「想い」を持っていると推察できる。

何故、沿岸部で暮らす人々は「祭」に対して意識が高いのか。

以下**3つの背景**より、沿岸地域と非沿岸地域を比較しながら「祭」とのつながりを紐解いていく。

### ① ルーツ

#### 海人族と農耕民族

沿岸地域居住者のルーツといえる海人族はどのような思想や性質を持っていたのだろうか。非沿岸地域居住者のルーツといえる農耕民族と比較しながら、現代にも受け継がれているであろう特性を紐解いていく。

- ・ 海人族の組織力
- ・ 厚い信仰心
- ・ 誇り高き氏族

### ② ハレとケ

#### 沿岸地域の非日常と日常

準備から片付けまで、祭を開催するには地域内での人とのつながりが重要となり、また祭を通して人々はつながっていく。沿岸地域での暮らしの非日常と日常をみながら、沿岸部特有の地域内外の結びつきを探る。

- ・ みんなと生きる
- ・ 地域と生きる
- ・ 沿岸地域の積極的受容

### ③ 信仰

#### 海と生きる人の祈り

祭の核ともいえる祭祀。その背景にはその地域特有の信仰が関係している。内陸部と違い沿岸地域にはどのような信仰が根付き、海とどのように関係するのかを考える。

- ・ まれびと信仰
- ・ 魚と人間
- ・ 山岳信仰
- ・ ホトケマブリ

## 海と生きる、沿岸部に暮らす人々

沿岸地域居住者が、何故非沿岸地域居住者よりも祭に対して意識が高いのかを考察するにあたり、まずは沿岸地域居住者がどのような人々かを知る必要がある。災害文化や漁村民俗学の研究者である川島秀一氏の著書の中に、沿岸部で暮らす人々を表した気仙沼市震災復興市民委員会の言葉が書かれている。

先人たちはこれまで何度も津波に襲われても、海の可能性を信じて再起を果たしてきた。人智の及ばぬ壮大な力としながらも、海を敵視せず、積極的に関わり合って暮らしてきた。それは、単に「海で」生活していたのではなく、人間は自然の一部であることを経験的に体得し、対等の関係を築いて「海と」生活していたとも言える。その態度が自然観や運命観、ひいては死生観となった。気仙沼の観念は海にある。いまを生きる世代が再び海の可能性を信じ、復興を成しとげることが犠牲者への供養となり、次世代への希望となろう。理念を超えた観念をメッセージ化したものが「**海と生きる**」である。

「海と生きる」。豊かな海の恵みを受けながらも、その恵みの海に命や生活を奪われ、また海の可能性を信じ生きていく。そんな地域の人々のこの言葉こそが、沿岸部で暮らす人々を表していると言えるのではないだろうか。また、川島氏は自然災害から回復していく漁業集落の諸相から、以下のように述べている。

もしも、この列島の自然がただ恵みだけを与え続けてばかりいたり、逆に災害だけを与え続けていたりしていたとしたら、人間は自然と深い関わり方はできなかつたであろう。**自然が畏怖と恵みという両義的なものを内在しているからこそ、自然に対する次元の高い信仰や文化が生まれた**ものと思われる。

自然は私達に多大なる恵みを与え命や文化的豊かさを育んでくれる。それと同時にときに大災害を引き起こし命や築いてきた文化を奪っていく。その自然の中でも、「海」が最も「感謝」と「畏怖」を感じる存在であり、日本人が深い関わりを持ってきた自然なのではないだろうか。次項よりその偉大な自然と生きる人々の背景へ思いをめぐらせ、**海と生きる人と祭の関係**について考察する。

川島秀一（2017）『海と生きる作法—漁師から学ぶ災害観』富山房インターナショナルより引用

## ①沿岸部居住者のルーツ 海人族

「海と生きる人」について考える上で避けては通れないのが、彼らのルーツである**海人族**である。海人族とは、古代、海辺で魚貝や海藻の狩猟・採取を行い、海から塩を精製し、航海による交易・通商に従事した集団のことで、農耕民族と違い土地に縛られる必要がないため、良い漁場を求め移住に積極的だった。『古事記』や『日本書紀』にも登場し神や天皇家と強い結びつきがあり、有事には水軍として活躍していた。古代海人族は、大きく分けて以下の3つに分類される。

### 宗像系

操船に優れ遠洋航海に長じ潜水・素潜りを得意とした。海部氏もこの系統。  
本拠地：北九州→日本海沿岸に広く移動  
祖神：宗像三女神 (p.14)

### 隼人系

インドネシアが源流で瀬戸内水軍の中核として成長していく最も戦闘的な海民集団。  
本拠地：南九州→九州沿岸に広く移動  
祖神：オオヤマツミノカミ (p.17)

### 安曇系

インド・中国系といわれ、船を使い釣りや網漁を併用、航海を得意とした。住吉氏はこの傍系。  
本拠地：北九州→西日本太平洋岸へ広く移動  
祖神：ワタツミ (p.14)

これら海人族は広く列島沿岸部へ分布し（安曇族は内陸部へも移住している）、応神朝(4～5世紀)頃から没落の兆しが表れ一部海賊として名を馳せた集団以外、子孫の大半は漁民として暮らした。現在の海と生きる人のルーツである沿岸部で生きた海人族と非沿岸部で生きた農耕民族とは、以下3点において大きな違いがあるのではないだろうか。

### 海人族の組織力 —遊牧民族の性質と軍事力—

海人族は良い漁場を求め積極的に集団で移動生活をしてきたため、地縁組織が発達しにくく、血縁組織がより強固であったと考えられる。また、優れた航海技術と軍事力を有した海人族は国のために水軍としても活躍をし、戦に生き残るための組織力が必要不可欠であったことも窺える。

**一族の結束や組織力を重視**する必要のあった海人族の性質は、慣習や文化などを介して今も脈々と受け継がれているのではないだろうか。

### 厚い信仰心 —神は常に共に—

土地が重要な定住農耕民族の信仰とは違い、それぞれの海人族には祖神がおり、新しく漁場を開拓し移住したところには必ずその祖神を勧請し祀るほど**海人族の信仰は厚かった**。上に述べたように組織の結束力を高めるための手段であったり、常に海や戦という危険に身を置く海人族にとって、信仰はとても嚴重で重要なものだったと言える。

### 誇り高き氏族 —誇りは奪われない—

命を懸けて生きることが日常であり、記紀の神話に登場し、朝鮮半島・大陸との海上交通路確保のため大和政権と強く結びついていたことから、**誇り高き氏族だった**とことが窺える。しかし、農耕が始まると人々の信仰は海と関係の深い「月」から「太陽」へ、仏法の「不殺生戒」により一時被差別者の身分となる等、時流や政略により海人族の立ち位置が翻弄されることも多かったが、穂高神社の御船祭り (p.8) が現代に受け継がれているように、その誇りは失われることはなく、「祭り」を介し時空を超えて存在し続けている。

## ②海とハレとケ

続いては、「海と生きる人」のハレ（非日常）とケ（日常）に焦点を当て、つながりについて考察していく。海という自然と共に生きることは日常的に自然の恩恵を得ながらも、海難者や漁撈での事故など死と対面する日常も存在する。また、非日常という意味では祭りと大災害も日常の連鎖の一部にある非日常的な時間である。内陸部にはない沿岸部ならではのハレとケを通じ、人々はどのようにつながるのだろうか。

### みんなと生きる —漁撈のケ—

海を相手に危険を伴い不確かな漁業だからこそ、集団で漁を行い分け前を平等にする地域も多い。これは、獲物が獲れない時にお互い助け合う「共助」の心だけでなく、船同士の競争による海難事故や資源の枯渇を防ぐためでもある。1つの漁場を共同利用することも、地域内の共同性が大変重要になってくると考えられる。また、集団操業をしない地域であっても、一家で漁を得るためと万が一の災害で家を絶やさないため、同じ家の者は別々の船に乗ることもあると言われている。常に危険と直面し協力し合いながら漁をする各船では、家族に関わらず結束が強固になると考えられる。

### 地域と生きる —ハレとケのつながり—

地域のハレの日である「祭り」という非日常的な時間では、地域内で役割分担を明確に設定し、人々が体系的に結集する機会である。そしてそのハレの日は、自然災害という非日常的な時間においても同様であると考えられる。宮城県南三陸町歌津では各集落に契約講があり、契約会がムラの祭礼を担っていた。東日本大震災では甚大な被害を受けたが、祭礼でも活躍する契約会会長夫妻の主導のもと契約会が中心となり、孤立した集落の道を拓きお年寄りを救出したり、食料の収集や飲料水の確保、簡易風呂の作成など、男女問わず役割を担い被災時の日常を逞しく生き抜いた。非常時の決断力や行動力は、日常的な結びつきやハレの日での共通体験が関係していると考えられ、いつ命を奪う海へと変わるかわからない沿岸部で生きる人々にとって、大切なつながりと言えるのではないだろうか。

### 沿岸地域の積極的受容 —外とのつながり—

沿岸地域によっては「仏を守る」という信仰が強く残っており、「家」（物理的な家ではなく不可視の家）継承のための様々な日常的慣行が存在した。津波で一家が被災した際には地域外の親族を家督にするなど、地域や血縁を超えた人とのつながりによって、度重なる津波の被害から家の再興を果たしてきた。また、明治29年の津波被災後に移住者を募った地域もあり、他地方からの人や新しい文化（漁法）の積極的受け入れも行っていた。海人族の古代から江戸明治の北前船、2つの世界大戦までの華々しい海上交易により、沿岸地域の人々の出入りは盛んだったと思われる。外の人々とのつながりを上手に保ちながら、地域社会を守り継承していくという沿岸部ならではの共同性があるのではないだろうか。



## ③海と生きる信仰

「祭り」には、信仰が欠かせない。人々の祈りや願いは神や祖霊を敬い祀ることで、祭りを生み出してきた。沿岸部居住者のルーツである海人族の誇りと海が紡いできた地域内外のつながりは、沿岸部特有の信仰を生み出してきたと考えられる。ここでは、海と生きる人がどのような信仰を持ち、その信仰がどれだけ沿岸部での暮らしと結びついているかを考察していく。

### まれびと信仰 —海よりの来訪者は福を運ぶ—

日本列島各沿岸地域には、魚や海難者などの漂流遺体/水死体を丁重に**供養することが大漁をもたらす**という信仰がある。遺体を拾い上げる時には各地域ごと、大漁を約束させる問答をしたり、船での祝い事と反対の位置から引き上げる作法などがある。身元不明の遺体の場合には無縁仏として拾い主が供養を行う。エビス (p.16,18) のように、手厚く弔い鎮めることでこれらの遺体が神格化した神を祀る地域もある。

### 魚と人間 —命は廻る—

列島沿岸部各地にみられるまれびと信仰だが、海難者と魚などの海洋生物の霊を同時に同じ場所で供養することも行われている。三重県の船で海道（魚の通り道）に沿って魚と共に海難者の供養と大漁祈願を行う行事や、沖縄県の集落内で亡くなった人を魚に例え人魚（ヒトザカナ）としてお祭りした行事（現在は違う事を行っている）などがある。また、高知県の「シットロト踊り」や岩手県の「鹿踊」など踊りを通じて魚と人間を同時に供養する民俗芸能も存在する。一方、狛供養祭などをみると、海以外で狩猟を行う人々は人間の側から生物の命に感謝をし供養を行う。先のまれびと信仰然り、海と共に生きる人々の**海洋生物の命と人間の命は等しく交換関係にある回帰的な生命観**がうかがえる。

### 山岳信仰 —山は海の恋人—

海の世界は山の森林によって形成される。山から土壌を通じ豊かな栄養素が供給される沿岸の岩場は海藻が繁茂し魚介類の宝庫となり、反面森林破壊が進むと山から土砂が流れ海藻と魚卵の生育場所である沿岸の岩場が砂漠化してしまう磯焼けが起こる。また山は、一般航海者や漁民にとって、船の位置や好漁場の位置を知る上で必要な目印としての機能を備えている。

**海洋環境保全、航海・漁業の目印として山は海にとって必要不可欠**であることを知る海と生きる人々は、海と同じように山にも神の存在を認め、山に鎮座する金毘羅様やオオヤマツミノカミを信仰してきたのではないだろうか。

### ホトケマブリ —てんでんこが生まれた背景—

東日本大震災の釜石の奇跡でも話題となった「津波てんでんこ」、この教えが生まれた背景に「ホトケマブリ」があったと言われている。ホトケマブリとは「仏を守る（供養する）」ことを指し、津波と聞けば位牌を風呂敷に包んで逃げ、生き残り、仏を守り弔う。津波は集落や一家の全滅を招きかねない大災害であり、**共倒れを防ぎ、家やその地域の文化・慣習などを継承する**ための沿岸部ならではの知恵ではないだろうか。

## 沿岸地域居住者の祭に対して意識が高い理由についての考察

沿岸地域居住者のルーツといえる海人族は、移動が多く常に危険と直面する性質上、一族の結束を重んじ、厚い信仰心を持ち、誇り高い氏族だった。その性質は、土地や伝統を介して現代の人々に受け継がれていると考えられる。

**海人族の血を受け継ぐ人々は、信仰のもと地域が一体となり自身のルーツを垣間見る「祭」に対して、潜在的に良い印象を抱いているのではないだろうか。**

海を相手にした不安定な生業、日常的な海上交易や非日常的な大災害によって、人の入出の頻繁な地域で共同性を高めることが地域の安寧につながるといえる。

**地域内の結びつきに価値や必要性を感じる沿岸地域の人々が、人と人とを結ぶ「祭」に対しても同じような価値を感じるのは必然ではないだろうか。**

海洋生物と人間の回帰的な生命観や、祈る対象である海の先にある山への崇拝など、沿岸地域特有の信仰が存在する。そして、1日1日を海への感謝と畏怖とともに生きるため、沿岸地域の人々の信仰心は厚いといえる。

**神や仏への感謝や祈りとともに日常を生きる沿岸地域の人々にとって、信仰のもとに存在する「祭」は、日常の信仰と同様に大切なものと認識しているのではないだろうか。**

以上が沿岸地域居住者の祭に対して意識が高い理由についての考察となるが、2020年度調査の沿岸部居住回答者のうち一次産業従事者は1.4%しかいなかった。つまり、回答者の**98.6%**は漁業従事者ではなく、漁業を生業とする者に限らず海と生きることが祭への意識を高めることにつながるといえる。偉大な「海」の存在が、我々に信仰心や人とつながり生きていく術を教えてくれるのではないだろうか。

**四方を海に囲まれた日本にとって大切な「海の祭」  
現状はどうなっているのだろうか**

## 現存する海の祭 約4600件

※株式会社シグナル作成「日本の祭り数及び海の祭り数に関する資料」（別紙参照）

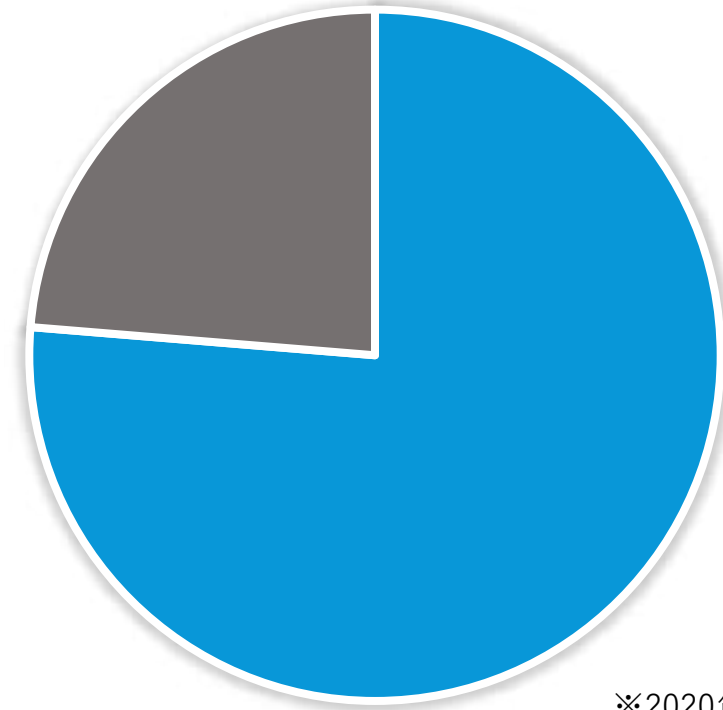
「海の祭」は、沿岸地域文化の象徴であり、その地域の人々により行われている。しかしながら、現在、沿岸地域においては第一次産業である漁業の衰退、地域経済の低迷、人口流出、少子高齢化などの課題があり、「**担い手不足**」「**資金不足**」に悩まされている海の祭が多い。この慢性的な課題に輪をかけ、昨今では異常気象による災害や未知の感染症により、継続的な祭の開催が困難な時代となった。実際、2020年に祭継続困難のため、開催中止ではなく「**終わり**」という決断をした海の祭がある。石川県穴水町で毎年4月に行われる豊作祈願の祭、白山神社春季例祭「鯖踊り神事」。昔、悪さを働く貉を好物の鯖を使い退治したことから始まり、神社の拝殿内をまな板に塩サバと包丁を乗せて飛び跳ねる神事を行う祭。400年以上の歴史に幕を降ろす事となった。形を保ったまま継続して行う事自体が困難になってきている海の祭。今後、天災や感染症により一度中断されてしまった祭を復活/持続させていく事はできるのだろうか。

## 2020年新型コロナウイルス感染症で中止(規模縮小開催)となった祭 約9割

※2020年度海の祭ismプロジェクト調査結果より

## あなたは、海の祭を日本に残したいと思いますか？

NO  
24%  
(190人)



YES  
76%  
(610人)

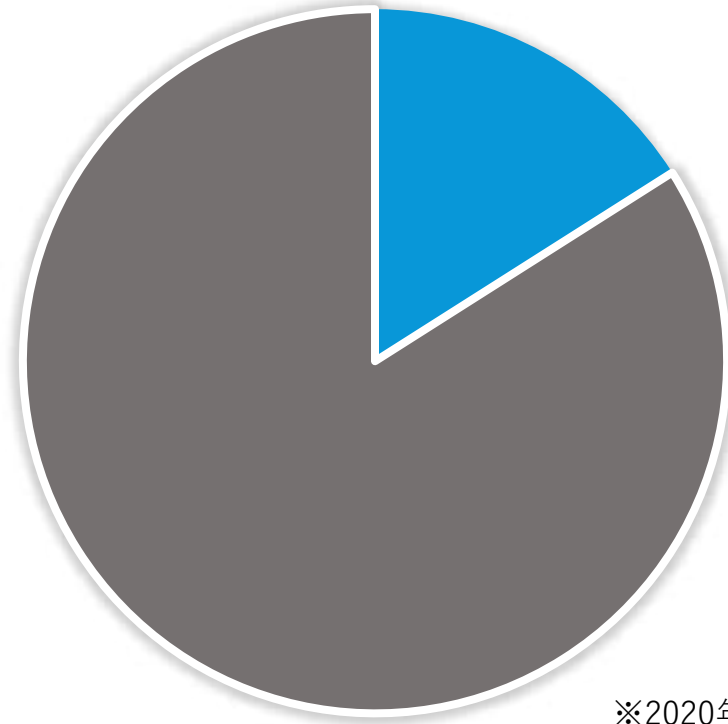
※2020年度海の祭ismプロジェクト調査結果より調査対象800人の回答

# 日本人の多くが 海の祭を守りたい

あなたは、海の祭と聞いて思い浮かぶ祭はありますか？

NO  
84%

(672人)



YES

16%

(128人)

※2020年度海の祭ismプロジェクト調査結果より調査対象800人の回答

しかしほとんどの人が海の祭を知らない

# 「海の祭を守りたいが知らない」という矛盾

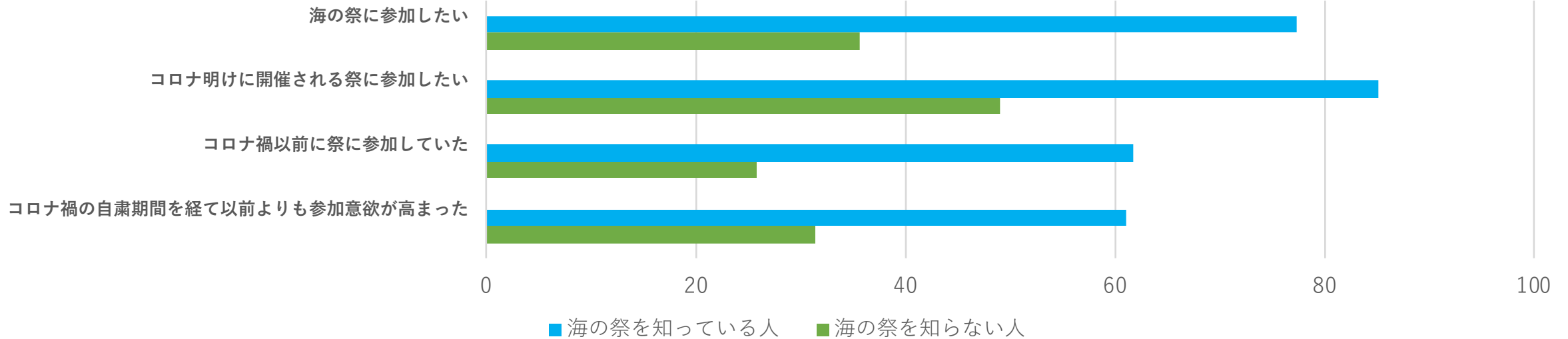
日本の多くの伝統文化にも言えることだが、「よく知らないけれど、ただ伝統文化という理由だけでなんとなく守っていくべき」という矛盾する現象が起こる。この矛盾は、「守りたい」という想いに主体性の欠如が見られ、「知らない」ということはその伝統文化の価値や魅力、歴史、現状、課題を「知らない」ということであり、守るための行動を起こすこともできない。まずは「知る」ことから始め、海の祭を守りたいという想いを、主体的な想いへと変える必要があるのではないだろうか。

## 海の祭の 認知度の向上が必要

海の祭を知ること、起こりうる変化とは

海の祭と聞いて思い浮かぶ祭があると答えた人とそうでない人  
祭への参加意欲の差が明らかとなった

## 祭の参加実態/参加意思



海の祭を知っている人の**約6割が 祭に参加していた**

海の祭を知っている人の**約8割が 海の祭に参加したい**と思っている

## 地域への貢献度

どんな海の祭（参加形式）ならより参加したくなりますか

地域活性につながるなら参加したい



オンラインで地元の祭を応援するイベントがあれば参加したいですか

参加したい



■ 海の祭を知っている人 ■ 海の祭を知らない人

海の祭を知る人の約半数が地域へ貢献したいと思っている



## 祭継承についての危機感

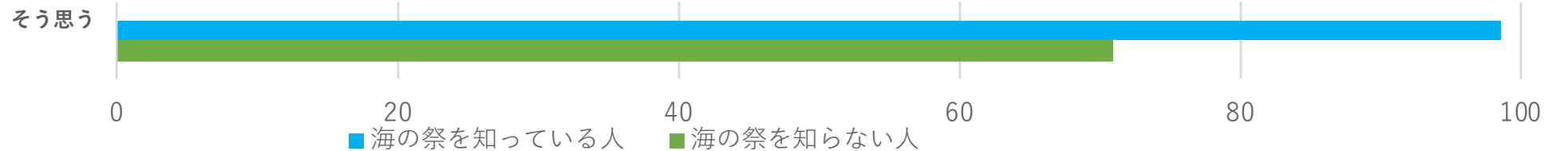
コロナ禍で失われる可能性が高いと思う日本文化は



今後祭が開催されなくなると思いませんか



あなたは、祭はなくなってもいけないものだと思いますか



海の祭を知る人の**約6割が 祭の継承に危機感**を抱いている

海の祭を知る人の**約10割が 祭を必要**としている

海の祭を「知る」ことで  
海の祭に参加したくなる

その地域へ愛着がわき  
貢献したくなる

価値や課題を自身の頭と身体で気づき  
「わたし」が海の祭を守りたいと思うようになる

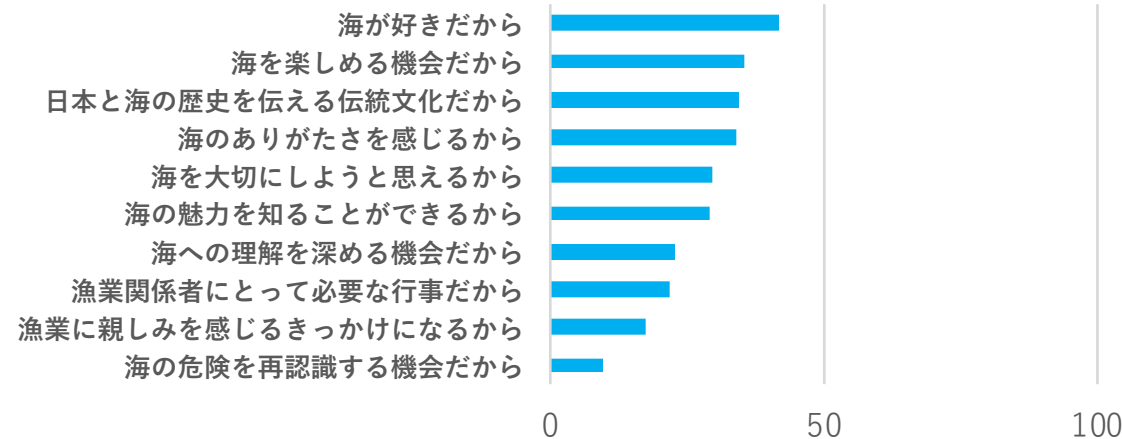
多くの人へ海の祭を知ってもらうためには  
何をすべきか

## 海の祭を守りたい理由、男女差が明らかに

あなたはなぜ、海の祭を日本に残したいですか？

### 男性

- 1位 海が好きだから
- 2位 海を楽しめる機会だから
- 3位 日本と海の歴史を伝える伝統文化だから



### 女性

- 1位 海を大切にしようと思えるから
- 2位 日本と海の歴史を伝える伝統文化だから
- 3位 海の魅力を知ることができるから



WHY

## 海の祭を守りたい理由

男性

海を娯楽の場として捉え、海の祭の中へ入り海で楽しむことに魅力を感じる傾向がある。

女性

海を物語の一部として捉え、海の祭を通して海とつながることに魅力を感じる傾向がある。

WHAT

## どんな情報がリーチするか

祭りの楽しみの部分

「**祭礼**」

祭りの物語の部分

「**祭祀**」

祭礼は、参加者同士一体感が生まれ、楽しいイベントのようなパフォーマンスとして存在しているものが多い。海での非日常的体験・仲間同士の共通体験に焦点をあて情報を発信することで、**海をより楽しめる方法の一つ**として海の祭に対する興味関心が喚起されるのではないだろうか。

祭祀は、祭りの本質とも言える物語が詰まっている。その土地特有の自然環境や地理的歴史、神様との物語に焦点を当てて情報を発信することで、海の祭の**パフォーマンスの奥に隠れた神秘的な魅力**を知ってもらい、海の祭に興味関心を持ってもらうことができるのではないだろうか。

## WHERE

## どの媒体で情報を発信するか

株式会社テストターの20～30代男女を対象とした「SNSとEC」に関する意識調査（2020年7月実査）より、「情報収集で利用するSNS」を男女で比較すると、**男性はTwitterの使用率が64.0%、女性はInstagramの使用率が70.7%**と高かった。

### 男性

## Twitterから発信

情報の拡散性が高く、リアルタイムで話題が追える

### 女性

## Instagramから発信

写真や動画などの視覚的な魅力や世界観が伝わりやすい



© Mikata Co., Ltd. All Rights Reserved.

## HOW

## どのように発信するか

2020年度調査「あなたは、どんな海の祭ならより参加したいですか？」の回答を比較

### 男性

1位 日常をリセットする体験として参加してみたい

「祭礼」を楽しめる**祭体験**プログラムの情報をTwitterを媒体としてリアルタイムに発信。主催者側からだけでなく参加者からの発信を促し、楽しさを共有。拡散を狙う。また、2番目に利用率の高かったYouTubeで、祭礼の楽しさが最も伝わりやすい動画を配信。**日常を離れた土地でその土地の人々と共通体験をしたい**と思える情報発信を目指す。

### 女性

1位 旅行の一環として参加してみたい

祭のある**土地の魅力**（観光スポットや美しい場所、美味しい食べ物など）と共に映える写真や動画を使用してInstagramから発信する。祭の物語「**祭祀**」を知ってもらうため、情報と共に神社の神秘的な写真や御朱印の紹介、祭の衣装などにも焦点をあて、**「この祭を観に旅行したい」**と思える情報発信を目指す。

また、2020年度調査では海の祭の認知度の低さに加え、新型コロナウイルス感染症によって全体の約9割の祭が中止（縮小開催）となったことが明らかとなった。これまでも人口減少や高齢化に伴い、祭の継承に対する危機感が高まる地域が多かったが、これを機に、それが一気に露になった結果と言える。

マツリズムが入手した情報の中には、この年を境に祭に終止符を打った地域や、天災・感染症と2年連続中止となったことを機に祭礼の一部を今後取りやめる決断をした地域もあった。

## 人知れず海の祭が消えていってしまう

# 海と日本人の歴史の物語 海の祭の記録が必要

## 事例：

2020年1月、国の文化審議会が、福島県いわき市を含む浜通りに伝わる「浜通りのお浜下り」について、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として選定するよう、文化庁長官に答申。東日本大震災・東電福島第一原発事故の発生や、少子高齢化の進行で、**伝統が途絶えつつある状況を踏まえ、記録を残すべき**と判断された。

「お浜下り」記録すべき無形文化財に 国の文化審が答申 いわき市など浜通りで伝承

2020年01月18日(土)更新

最終更新：1月18日午後3時50分

国の文化審議会（佐藤信会長）は17日、いわき市を含む浜通りに伝わる「浜通りのお浜下り」について、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として選定するよう、宮田亮平文化庁長官に答申した。お浜下りはいわき市や双葉郡、南相馬、相馬市、相馬郡の11市町村で伝承されており、東日本大震災・東電福島第一原発事故の発生や、少子高齢化の進行で、伝統が途絶えつつある状況を踏まえ、記録を残すべきと判断された。

浜通りのお浜下りは神が至り着き、現れたとされる海浜を巡る顕著神伝承による祭事で、海に神輿（みこし）を奉じたり、海水を汲（く）んで供えたりする。

神輿の海中建御など浜下りは全国各地で見られるが、浜通りの場合、タテバと称する御旅所（おたげしよ）や斎場の設け方に加え、付随する諸宮能も含め、日本の浜下りに関する祭祀（さいし）のあり方や、変遷を理解する上で注目される存在という。

いわき市でも北は久之浜・大久地区から、南は勿来地区まで広く残るが、平菅波の大國魂神社の「お瀬採り神事」では、神輿を深く海につからせるため、浜下りの最も古い形とされている。

市によると、5月4日の本祭りに合わせ、神輿にご神体を移し、氏子の青年の手によって、平菅波の浜を日新す。このご神体は平菅波から濡れ着いたいわれを持ち、浜下りをしないと、不漁になったり、悪疫がはやると言われている。

一方、震災・原発事故の影響もあって、見送られている浜下りもある。四倉町の四倉諏訪神社でも5月4日の例大祭に際し、四倉海水浴場で神事とともに、神輿の海中建御を実施し、大漁を願っていたが、震災前年の平成22年を最後に中止している。

清水市長は「近年は廃止や規模の縮小も確認されている中で、この祭事的重要性を再認識する契機となるもので、大変意義深い。本市としては、お浜下りを含む地域の祭事を確実に継承し、未来に受け継いでいけるよう取り組む」とのコメントを寄せた。



©いわき民報

## 海の祭レポート



2019年度海の祭ismプロジェクトでは、新規開拓として全国各地の海の祭へ訪問。北前船をテーマに取材を行いレポート記事を作成した。

2020年度海の祭ismプロジェクトでは、コロナ禍ならではの情報として、「祭のないハレの日」をテーマに、海の祭の担い手へオンラインインタビューを実施。記事としてHPで発信した。

## 海の祭の写真・動画



2018、2019年度海の祭ismプロジェクトでは、海の祭の体験プログラムを実施した際にプログラムの様子を写真と動画に収めた。特に動画は視覚的聴覚的に祭を記録する事ができ、一連の流れや雰囲気など得られる情報が多い。

## 担い手へのインタビュー動画



2020年度海の祭りismプロジェクトでは、コロナ禍となり現地へ直接訪問する事ができなかった。その代替案として、レポートのためのオンラインインタビューを実施。インターネット上で手に入る海の祭の情報は限られており、担い手の生の声は貴重な記録となる。祭を詳しく知っている人物の高齢化も進み、次代へ物語の継承ができないまま情報を失うことを防ぐことができる。

**海の祭が消滅しても  
復活の日がきたとき、この記録が一助となる**



# 海の祭ismプロジェクトだからできること

「海の祭」の広報活動を行い、多くの人に知ってもらう  
「海の祭」の取材・記録を行い、海と日本人の歴史の物語を後世へ伝える

## 発信

「海の祭」をターゲットごとにアプローチ方法を選んで世の中へ発信、認知度を高め魅力や地域における価値を知ってもらう

## 結

「海の祭」ネットワークを作り、担い手同士が情報交換/共助できるような関係を構築する

## 伝承

消滅に備え「海の祭」にまつわる物語を記録し、未来へ継承していける形にする

## 体験

海の祭の内側に入り担い手と共に参加する祭ツアーリズムを提供し、担い手不足解消と参加者の属性に応じた課題解決を狙う

## 応援

オンラインイベント等でコロナ禍から復活する海の祭を応援し、認知度を高めると同時に持続可能なものにしていくサポートをする



本資料の作成期間中も、新型コロナウイルス感染拡大の影響により日本各地の祭の開催や中止に関する記事が世の中を踊った。興味深かったのは、各ネット記事に寄せられた祭に対する否定的なコメントである。祭への情熱に溢れた行動への批判や、祭の消滅を願うコメントまでであった。

どうしても「祭」というと、反社会勢力やヤンキーのイメージ、素行の悪さと結びつくことが多い。私自身も祭に関わるまでは同様のイメージを持っており、交通規制や羽目を外す行為に「迷惑」を、熱狂する集団と飛び交う怒号に「怖さ」を感じていた。

否定的なコメントを投稿していた方々が祭に関してどの程度の知見があるかは分からないが、「祭を知る」ことで私の見方は180度変わった。それまでは祭のわずかな可視部分だけで祭全体に対するイメージを持っていたが、祭の本質は「人々の祈り」にあり、日本人が大切にしてきた自然への慈しみや神仏を敬う心がつまっていることに気づかされたからだ。そして、それまで「怖い」と感じていた祭の担い手は、みな一様に優しく、地域への愛着心、他者への思いやりと強い責任感を持っていた。

2020年度調査結果でも矛盾が露となったが、「知らない」ことは、思いがけず本来大切にすべきものを排除してしまうことにもつながる。「知る」ことで初めてその物事の本質を捉えることができ、知らないときよりも正しい判断ができる。「知ろうとする」ことは、私たちがより良い未来を生きるためにも大変重要な行為なのではないだろうか。

ここで、今回「沿岸地域居住者の祭に対する意識についての考察」で大変お世話になった著書、川島秀一氏の『海と生きる作法―漁師から学ぶ災害観』より、東日本大震災後、仮設住宅に住みながら漁師を続ける方の漁船を出す日に神棚へ捧げる祈りの言葉を紹介したい。

**「八大龍神、お船霊、金毘羅さんのオミタマ様、金華山のオミタマ様**

**大きな大きな神様に守られて**

**今日もオフネがでますので、お守りください。」**

私たち日本人という民族は、海という両義的な自然とともに歴史を歩んできた。その偉大な自然は人々に信仰心を生み、日本人は森羅万象に神の存在を認め、多くの神々と共に生き、祈り願って暮らしてきた。

この漁師の祈りの言葉は、そんな日本人の「心」と「歴史」がつまっている、悠久の美しさを感じる言葉だった。

海の祭は、私たち日本人と海の記録である。その祭の価値や魅力がより多くの人へ認知され、多くの人に愛されることを願って。

「海の祭」をこれまで担ってきた先人たち、今を担っている方々へ、心からの敬意と感謝を込めて結びとさせていただきます。

- ・かみゆ歴史編集部『日本の信仰がわかる神社と神々』2018朝日新聞出版
- ・榎本秋『カラー版徹底図解古事記・日本書紀』2014新星出版社
- ・沢辺有司『図解いちばんやさしい古事記の本』2016彩図社
- ・平藤喜久子『日本の神様解剖図鑑』2020株式会社エクスナレッジ
- ・前田速夫『海人族の古代史』2020河出書房新社
- ・『小木琴浦の盆行事』新潟県教育委員会より拝借
- ・鈴木啓輔『海と神そして日本人』2019雄山閣
- ・川島秀一『海と生きる作法』2017富士房インターナショナル

- ・八百万の神大図鑑  
<http://xn--dvd-ib5h639g.jp/postcard/%E5%AF%97%E5%83%8F%E4%B8%89%E5%A5%B3%E7%A5%9F/>
- ・日本の神社  
<https://xn--u9ju32nb2az79btea.asia/>
- ・少彦名神社HP  
<http://www.sinnosan.jp/saiji.html>
- ・茨城県神社庁HP  
<http://www.ibaraki-jinjacho.jp/ibaraki/kenhoku/jinja/04013.htm>
- ・秋田市公式Youtube（土崎港曳山まつり）  
<https://www.youtube.com/watch?v=mWTlcllTivY>
- ・土崎港曳山まつりHP  
<https://tutizaki-hikiyama.com/>
- ・信州安曇野公式観光サイト  
<https://www.azumino-e-tabi.net/moevent/moevent-9562>
- ・安曇野市役所HP  
<https://www.city.azumino.nagano.jp/site/mizumonogatari/2490.html>
- ・能登町役場HP  
[https://www.town.otoyama.jp/www/normal\\_top.jsp](https://www.town.otoyama.jp/www/normal_top.jsp)
- ・三谷祭HP  
<https://38fes.jp/>
- ・蒲郡市役所HP  
<https://www.city.gamagori.lg.jp/life/4/75/183/>
- ・ウェザーニュース記事  
<https://weathernews.jp/s/topics/201910/290135/>
- ・鯖踊り神事とし坊のお祭り三昧ブログ  
<https://blog.goo.ne.jp/7079maturitoshi/e/8b0d72677a8d7785510b1cb566241afc>
- ・住吉大社HP  
<http://www.sumiyoshitaisha.net/events/special.html>
- ・Oh Matsuiri  
<https://ohmatsuri.com/ja/articles/ehime-oyamazumi-jinja-reitaisai>
- ・水上のルーツと生活文化（pdf）  
[file:///C:/Users/yaman/Downloads/BKK0001922%20\(1\).pdf](file:///C:/Users/yaman/Downloads/BKK0001922%20(1).pdf)
- ・松江観光協会hp  
[https://www.mihonoseki-kankou.jp/sinji/sinji\\_ryujiinsan/](https://www.mihonoseki-kankou.jp/sinji/sinji_ryujiinsan/)
- ・塩竈市観光物産協会HP  
<http://kankoubussan.shiogama.miyagi.jp/tourism/minato-matsuri.php>
- ・塩竈みなと祭り（TRIP NOTE）  
<https://tripnote.jp/miyagi/place-shiogama-minato-matsuri>
- ・広島管弦祭について（観光バンク）  
[https://kanko-bank.com/event\\_spots/detail/3329/2020\\_8\\_6\\_%E7%AE%A1%E7%B5%83%E7%A5%AD](https://kanko-bank.com/event_spots/detail/3329/2020_8_6_%E7%AE%A1%E7%B5%83%E7%A5%AD)
- ・日本船主協会  
[https://www.jsanet.or.jp/data/items/r\\_01.html](https://www.jsanet.or.jp/data/items/r_01.html)

- ・金吾龍神社hp  
<https://kingoryujin.org/>
- ・土崎港曳山まつり海と日本動画  
<https://www.youtube.com/watch?v=7BT1EYf8y6k>
- ・土崎神明社HP  
<https://tsuchizakishinnmeisha.or.jp/%E6%9B%B3%E5%B1%B1%E8%A1%8C%E4%BA%8B>
- ・ソーシャルイノベーションニュース（土崎港曳山まつり）  
<https://social-innovation-news.jp/?p=885>
- ・北前船とは  
<https://www.kitamae-bune.com/about/main/>
- ・海の祭レポート  
<https://matsurism.uminohi.jp/>
- ・茅ヶ崎と浜降祭  
[https://www.maruhaku.tv/video-theme/theme20/theme20\\_full/](https://www.maruhaku.tv/video-theme/theme20/theme20_full/)
- ・日本から祭りが消える非 記事  
<https://news.yahoo.co.jp/articles/af92db67b2c19ec7a4c8eb1bbdf940462badfb0f?page=2>
- ・いわき民報  
<http://www.iwaki-minpo.co.jp/app/wp-content/uploads/2020/01/20200118.html>
- ・ホーランエンヤHP  
[https://www.ho-ran2019matsue.jp/about\\_jinja.html](https://www.ho-ran2019matsue.jp/about_jinja.html)
- ・日本伝承大鑑  
<https://japanmystery.com/simane/jozan.html>
- ・北海道神社庁HP  
<https://hokkaidojinjacho.jp/%E5%9A%B4%E5%B3%B6%E7%A5%9E%E7%A4%BE-9/>
- ・札幌の神社と御朱印  
<https://sapporo-jinja.com/miyoshiokami/>
- ・たびこふれ 礼文島蔵島神社例祭  
<https://tabicofret.com/article/77831/index.html>
- ・礼文島における神社信仰について（北海学園学術情報リポジトリ）  
[http://hokuga.hgu.jp/dspace/bitstream/123456789/4050/1/%E6%B3%95%E5%AD%A6%E7%A0%94%E7%A9%B6%E7%A7%91%E8%AB%96%E9%9B%86\\_%E7%AC%AC21%E5%8F%B7\\_03%E5%9D%AA%E7%94%B0.pdf](http://hokuga.hgu.jp/dspace/bitstream/123456789/4050/1/%E6%B3%95%E5%AD%A6%E7%A0%94%E7%A9%B6%E7%A7%91%E8%AB%96%E9%9B%86_%E7%AC%AC21%E5%8F%B7_03%E5%9D%AA%E7%94%B0.pdf)
- ・国指定文化財等データベース（文化庁）  
<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/302/673>
- ・秋田市観光イベント情報サイト  
<https://www.akita-yulala.jp/selection/5000011403>
- ・京都通百科事典  
<https://www.kyototuu.jp/jinja/MikotoKasuga.html>
- ・北海道江差町の観光情報ポータルサイト  
<https://esashi.town/matsuri/page.php?id=131>
- ・一般社団法人富島観光協会  
[https://www.miyajima.or.jp/event/event\\_kangen.html](https://www.miyajima.or.jp/event/event_kangen.html)
- ・宮島別荘  
<https://miyajima-villa.jp/press/?p=9316>
- ・半田山車祭保存会  
<https://dashimatsuri.jp/matsuri/kamezaki>
- ・亀崎潮干祭保存会HP  
<https://shiohi-matsuri.jp/>
- ・日本三大船祭り  
<https://www.3matsuri.com/nippon/oofunasai/#:~:text=%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%B8%89%E5%A4%A7%E8%88%B9%E7%A5%AD%EF%BC%88%E7%95%B0%E8%AA%AC,%E7%A5%AD%E3%80%91%E2%94%82%E4%B8%89%E5%A4%A7%E7%A5%AD%E3%82%AC%E3%82%A4%E3%83%89>
- ・日本三大船神事  
<https://tabi-mag.jp/funashinji-big3/>
- ・大阪天満宮  
<https://osakatemmangu.or.jp/saijireki/tjm/>
- ・ながと  
[https://nagatoto.jp/1903\\_tawarayamaryokuyou/](https://nagatoto.jp/1903_tawarayamaryokuyou/)
- ・記憶の森を歩く  
<http://kanke2017.blogspot.com/>
- ・むたい俊介オフィシャルサイト  
<https://www.mutai-shunsuke.jp/policy128.html>
- ・古代史にあそぼう  
<http://www.honnet.jp/metro/kodaishi/k228/kodaishi10.html>

- ・古事記ゆかり地マップ  
<http://www.pref.nara.jp/miryoku/narakikimanyo/yukaritimap/osazaki.html>
- ・輪島ナビ  
<http://wajimanavi.lg.jp/www/view/detail.jsp?id=1041>
- ・いいじ金沢  
<https://iijikanazawa.com/news/contributiondetail.php?cid=6782>
- ・天領祭と黒島地区とのつながり（金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書）  
[file:///C:/Users/yaman/Downloads/AA12079036-24-79%20\(3\).pdf](file:///C:/Users/yaman/Downloads/AA12079036-24-79%20(3).pdf)
- ・兵庫県神社庁HP  
<http://www.hyogo-jinjacho.com/data/6321051.html>
- ・文化財を訪ねて（赤穂市教育委員会）  
<https://www.yamareco.com/modules/yamareco/showfile.php?fid=18597>
- ・大遼神社（神社と古事記）  
<https://www.buccyake-kojiki.com/archives/1062333380.html>
- ・坂越の船祭り（ソーシャルイノベーションニュース）  
<https://social-innovation-news.jp/?p=867#:~:text=%E5%85%B5%E5%BA%AB%E7%9C%8C%E3%83%BB%E5%9D%82%E8%B6%8A%E3%81%A7%E6%AF%8E%E5%B9%B4,%E3%81%8B%E3%82%89%E8%A1%8C%E3%82%8F%E3%82%8C%E3%81%A6%E3%81%8D%E3%81%9F%E3%80%82>
- ・瀬戸内海の伝統文化  
[https://www.seto.or.jp/upload/publish/seto\\_umi\\_dentou\\_siryu.pdf](https://www.seto.or.jp/upload/publish/seto_umi_dentou_siryu.pdf)
- ・カスベについて（農林水産省HP）  
[https://www.maff.go.jp/keikaku/syokubunka/k\\_ryouri/search\\_menu/menu/kasubenonitsuke\\_hokkaido.html](https://www.maff.go.jp/keikaku/syokubunka/k_ryouri/search_menu/menu/kasubenonitsuke_hokkaido.html)
- ・お祭り大好き  
<https://www.iz2.co.jp/calendar/?p=2456>
- ・沖縄県公文書館  
[https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that\\_day/4948](https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that_day/4948)
- ・OKINAWA TRAVEL INFO  
<http://okinawatravelinfo.com/ja/feature/201704hari/>
- ・ハーリーについて（たひらい）  
<https://www.tabirai.net/sightseeing/feature/okinawa-haarai.aspx>
- ・ハーリー由來まつり（沖縄CLIP）  
<https://okinawaclip.com/ja/detail/329>
- ・豊浜商工会議所  
<http://www.tac-net.ne.jp/~starfish/>
- ・豊浜鯛まつりについて  
<http://oina-toyohama.net/taimatsuri/%e8%b1%8a%e6%b5%9c%e3%81%ae%9af%9b%e3%81%be%e3%81%a4%e3%82%8a>
- ・愛知県の公式観光ガイド  
<https://www.aichi-now.jp/spots/detail/304/>
- ・知多半島ナビ  
<http://japannavi.co.jp/chita/event/all/00529.html?mode=sp>
- ・亀崎潮干祭について（文化遺産オンライン）  
[https://bunka.nii.ac.jp/special\\_content/ilink1](https://bunka.nii.ac.jp/special_content/ilink1)
- ・亀崎潮干祭の祈願について  
[https://www.city.handa.lg.jp/kikaku/shise/koho/shiho/h28/documents/1441\\_3.pdf](https://www.city.handa.lg.jp/kikaku/shise/koho/shiho/h28/documents/1441_3.pdf)
- ・宗像大社HP  
<http://www.munakata-taisha.or.jp/reitaisai.html>
- ・高宮神奈備祭について（J:COM）  
<https://c.myjcom.jp/jch/p/kannabisai.html>
- ・宗像市ローカルブログ  
<http://www.munakata.link/?p=3051>
- ・福岡県徹底探検隊  
<http://www.yado.co.jp/tiiki/munakan/miaresai/miaresai.htm>
- ・新潟文化物語  
<https://n-story.jp/topic/122/page1.php>
- ・濱田武士『漁業者集団の共同性』  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jarcs/30/0/30\\_37/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jarcs/30/0/30_37/_pdf)
- ・MATCHA  
<https://matcha-jp.com/jp/6729>
- ・滝沢村史  
[http://www.city.takizawa.iwate.jp/contents/sonshi/page04\\_chapter1.html](http://www.city.takizawa.iwate.jp/contents/sonshi/page04_chapter1.html)

## 1位 釜石まつり (岩手県釜石市) A

毎年10月第3日曜日を含む金・土・日に岩手県釜石市で行われる。1967年市制施行30周年を機に、「尾崎神社例大祭」と「新日鉄石山神社例大祭」の合同祭として実施されたのが始まり。中日には、尾崎半島にある尾崎神社本宮から船で市内にある里宮にご神体を奉遷する「曳き船まつり」が行われ、お召船を中心に、虎舞や神楽を乗せた十数隻の船が大漁旗をなびかせて釜石港内をパレードする。



曳舟まつり



神輿の市内渡御

御祭神	祈願	祭礼	由来
尾崎神社 (ヤマトタケルノミコト/ <b>ワタツミ</b> )、山神社 (製鉄所守護神)	<b>海上安全</b> 、 <b>大漁</b> 、2011年以降は復興	<b>神輿海上渡御 (曳き船)</b> 、神輿市内渡御、虎舞、神楽、鹿踊、行列	釜石の守護神として崇敬されてきた尾崎神社と日本製鉄所の守護神である山神社の例大祭を昭和42年から合同で行うことになった。

## 2位 浜降祭 (神奈川県茅ヶ崎市) B

毎年7月第3月曜日（海の日）に茅ヶ崎西浜海岸で開催される神奈川県の無形民俗文化財。夜明けとともに茅ヶ崎市と寒川町の各神社から、大小合わせて約40基の神輿が集まり、「どっこい、どっこい」という掛け声と共に砂浜狭しと乱舞する。天保9年(1838)、寒川神社の神輿が磯町に渡御した帰途、相模川の渡し場で寒川の氏子が争いを起こし川に落ちて行方不明になってしまった。その数日後、南湖の網元である孫七さんが漁の最中にこのご神体を発見し寒川神社に届けたことを機に、毎年同神社の神輿がそのお礼のため南湖の浜に赴き海で「禊」をするようになった。



海での禊

©Samukawa-jinja Shrine All Rights Reserved.



多くの神輿が浜辺に集結

©Samukawa-jinja Shrine All Rights Reserved.

御祭神	祈願	祭礼	由来
寒川神社（寒川大明神/江戸時代まで八幡さま）、明治6年以降鶴嶺八幡宮（八幡さま）、その他32神社が参加	お礼参り、禊	禊（神輿が海に入る）、神輿市内渡御（禊後に各神社へ戻る）	天保9年寒川神社の神輿がの渡御中、氏子同士の争いで川へ落ち行方不明になったご神体を南湖の漁師が助けお礼参りするようになった説と、鶴嶺八幡宮で毎年浜辺で禊をしていた説がある。元は寒川神社の例祭で明治6年以降鶴嶺八幡宮、他の供奉神社と合同で行うようになった。

## 3位 海神社秋祭り (兵庫県神戸市)

A

毎年毎年10月10日から12日に行われる海神社の秋祭り。10月12日に海上渡御祭が行われ、航海安全や漁業繁栄を主として祈願される。垂水漁港から御座船に神輿を乗せ海上渡御が始まり、漁港の湾内を3周し、航海安全を祈願するお祓いが行われる。その時に花火(昼間の祝砲)が打ち上げられる。神輿渡御の他に各地区の布団太鼓(現在は4基)が存在し、市内を巡行する。



海上渡御祭

©神戸観光壁紙写真集



布団太鼓

©神戸観光壁紙写真集

御祭神	祈願	祭礼	由来
海神社 (ワタツミ/オオヒルメムチノミコト)	海上安全、漁業繁栄、農業繁栄、氏子崇敬者繁栄	神輿海上渡御、神輿市内渡御、布団太鼓巡行	約1800年前神功皇后が三韓よりの帰路、暴風雨のため帰国できなくなり、ワタツミノカミに祈願したところ風波がおさまり無事に都へ帰還できた。その祈願の場所へ社を建てた事が鎮座の由来。

## 4位 ハーリー (沖縄県各地)

A

毎年5月から6月にかけて、沖縄各地で盛大に行われる600年前から続く豊漁と海上安全を祈願する伝統漁船の競漕の祭り。ハーリーは中国から伝来したといわれ、競漕に用いる船を爬竜船（はりゅうせん）と呼ぶ。14世紀の王・汪応祖が中国へ留学した際、龍神様に雨乞いを祈願する儀式であるドラゴンボートの競漕をみて帰国。豊見城の王になった後干ばつ対策として、爬龍船を漫湖に浮かべ雨乞いの儀式を執り行い、見事に雨を降らせることができた。その後琉球各地に広がり、ハーリー（場所によりハーレー）と呼ばれるようになった。

那覇ハーリー/久米島ハーリー/前兼久ハーリー/嘉手納ハーリー/北谷ニライハーリー/糸満ハーレー/港川ハーレー/粟国海神祭/奥武島海神祭/読谷村ハーリー大会/伊江島海神祭パバリ/ハーリー由来まつり（ハーリーの発祥地、豊見城で行われる）



那覇ハーリー

©たびらい



奥武島海神祭

©たびらい

御祭神	祈願	祭礼	由来
中国の龍神	海上安全、豊漁※各地域により異なる	ハーリー由来まつり、ハーリーによる競漕	14世紀の琉球王が中国留学した際に雨乞い儀式であるドラゴンボート競漕を見て、帰国後琉球で普及させた。

## 5位 豊浜鯛祭り (愛知県南知多町) A

毎年7月中旬の土・日曜日に開催される豊漁と海上安全を祈る祭り。明治18年頃祭礼に興を添えようと「ハツカネズミ」の張りぼてを作ったのが最初といわれ、その後魚類になり、大正初期に「大鯛」となり、昭和初期には胴内ではやしなごら海に泳がせるようになった。長さ10～18mの竹と木の骨格に白木綿を巻いて作った大小の鯛5匹が若者達にかつがれ街中や海を練りまわる奇祭。海中を生きているように尾を振り勇壮に練り歩く様が見どころ。須佐地区は4体の鯛同士がぶつかり合う。



海中で勇壮に練り泳ぐ鯛

©Aichi Prefecture.



御仮屋で鯛の奉納

©Aichi Prefecture.

御祭神	祈願	祭礼	由来
津島神社 (牛頭天王/スサノオノミコト) その他5神社が参加	豊漁、区民の安全と繁栄	鯛みこし市内渡御、船に曳かれ鯛みこし海を遊泳、大鯛海中渡御、太鼓打ち	本社の川祭りにちなんで海の祭をするようになり明治18年頃津島神社の祭礼に興を添えようとハツカネズミの張りぼてを作ったのが始まり。その後魚類になり大正初期に「大鯛」となった。



## 6位 塩竈みなと祭 (宮城県塩竈市)

A

塩竈市にて毎年7月第3月曜日（海の日）に開催される、海上安全と大漁を祈願するお祭り。日本三大船祭りのひとつに数えられている。最大の見所である「神輿海上渡御」では、日本三景の松島湾に、陸奥国一宮 志波彦神社・鹽竈神社の御神輿を乗せた「御座船 鳳凰丸・龍鳳丸」の2隻の御座船が約100隻の供奉船を従え、松島湾を巡幸。前夜祭では約8,000発の花火が打ち上げられる。鹽竈神社の神輿が海を渡る東北で初めての神輿海上渡御で、海からの道案内の役割を果たしこの地に残った御祭神、シオツチを年に一度海へお連れする感謝祭。



神輿海上渡御 (鳳凰丸)

©塩竈市観光物産協会



塩竈甚句から作られた曲  
よしこの塩竈

©塩竈市観光物産協会

御祭神	祈願	祭礼	由来
鹽竈神社 (シオツチオジノカミ/タタケミカヅチ/フツヌシ)、昭和39年以降志波彦神社 (志波彦大神)	御祭神への感謝、海上安全、大漁	神輿海上渡御、神輿市内渡御、陸上パレード、踊 (よしこの鹽竈)、花火	戦後間もない昭和23年、港町塩竈の産業復興と疲弊した市民の元気回復を願って始められた。

## 7位 熱海こがし祭り (静岡県熱海市) B

毎年7月15日、16日に行われ、各町内から伝統の木彫り山車や装飾山車など30数基の山車と6団体の神輿が並ぶ「こがし祭り山車コンクール」と、来宮神社の神々を御鳳輦に乗せて町に降る「御神幸行列」を中心とした来宮神社の例大祭。御鳳輦は毎年42才になる男子により担ぎ上げられ町中を練り歩き、浜から海中に入る神事を行う。1300年前、熱海湾で漁夫が五十猛命のご神体を拾い、熱海の西山へ祀ったことが起源とされ、御神前に麦こがし等を供えたことから、猿田彦が麦こがしを道に撒き神輿の道中を案内するようになった。



御神体が流れ着いた浜から海中へ入る神事



山車コンクール

御祭神	祈願	祭礼	由来
来宮神社 (来宮大明神/ヤマトタケルノミコト/イタケルノミコト/オオナモチノミコト)	御祭神への感謝、無病息災	神輿市内渡御、鹿島踊、神楽、 <b>禊 (御鳳輦の浜降り)</b> 、山車コンクール	和銅3年6月15日(新暦7月15日)熱海湾で漁夫が網をおろしていたとき、イタケルノミコトの御木像が網に入り、お告げを聞き熱海の西山へ祀った。御神前に麦こがし/百合根/ところ/橙をお供えた。

## 同率 8位 宮島管弦祭 (広島県廿日市市) A

広島県廿日市市の厳島神社で旧暦 6月17日に行なわれる海上渡御の祭り。日本三大船神事にかぞえられる厳島神社最大の神事。船神事であることから、潮の干満を考慮し大潮の日に調整しておこわれ、満月の灯りに照らされながら本殿に還ってくる管絃船の風雅な姿は真夏の瀬戸の海を舞台に繰り広げられた一大平安絵巻を思わせる。平安貴族たちが邸内の池や川に船を浮かべて管弦を奏していたのを、平清盛が宗像三女神を祀るために厳島神社に移したのが始まりとされる。



神輿は厳島神社から御座船へ

©Hotel Miyajima Villa

夜の厳島神社に帰ってきた御座船

©Hotel Miyajima Villa

御祭神	祈願	祭礼	由来
厳島神社 (宗像三女神)	御祭神の御神慮を慰め奉る	神輿海上渡御、管弦、權伝馬船、	平安時代の貴族たちが池や河に船を浮かべる管弦の遊びを、平清盛が信仰する厳島神社に移し神事として行うようになった。

## 同率 8位 亀崎潮干祭 (愛知県半田市) B

毎年5月3日、4日に半田市亀崎町で行われる祭り。300余年の歴史があり、地域社会の安泰や災厄防除を願う「山・鉦・屋台行事」として、2016年にユネスコ無形文化遺産に登録された。神前神社の御祭神である神武天皇が東征した折、海からこの地に上陸したとの伝説にちなみ、5輦の山車を浜へ曳き下ろしたことからこの名がつけられた。5輦の山車を干潮の海浜に曳き下ろす勇壮華麗な瞬間が最大の見どころ。



干潮の海浜に5輦の山車が並ぶ

© 2017 全国共済農業協同組合連合会



勇壮華麗な海浜曳き下ろし

©Aichi Prefecture.

御祭神	祈願	祭礼	由来
神前神社 (神武天皇)、尾張三社 (スサノオ/ヤマトタケル/アメノホアカリ)	地域安泰、災厄防除	山車海浜曳き下ろし、山車市内曳き回し	神武天皇 (御祭神) が東征した際海から亀崎に上陸した伝説にちなみ山車を浜へ曳き下ろした説と、亀崎の地に移り住んだ武家の発起による説がある。

## 同率 8位 宗像大社秋季例大祭 (福岡県宗像市) A

毎年10月1日～3日の3日間行われる宗像大社の秋季例大祭。放生会（ほうじょうえ）ともいい、国家の平穏・五穀豊穡・海上安全・大漁を感謝する。初日の10月1日の初頭を飾るのが海上神幸「みあれ祭」で、田島の辺津宮（宗像大社）で宗像三女神が一同に会して秋祭大祭を行うため、辺津宮に祀られている市杵島姫神が、沖の島にある沖津宮に祀られている田心姫神と筑前大島の中津宮に祀られている湍津姫神を乗せた2隻の御座船を出迎える祭り。壮大な海上パレード「みあれ祭」から始まり、古式ゆかしい「高宮神奈備祭」で幕を閉じる。



大船団の海上パレードみあれ祭

©レストランハイポー



撮影禁止の高宮神奈備祭

※2020年貴重な神事の様子がLIVE配信された。  
©Jupiter Telecommunications Co., Ltd.

御祭神	祈願	祭礼	由来
宗像大社 (宗像三女神)	航海安全、大漁、国家安泰と五穀豊穡への感謝	海上渡御、神輿	辺津宮に祀られている市杵島姫神が、沖の島にある沖津宮の田心姫神と筑前大島にある中津宮の湍津姫神を乗せた2隻の御座船を出迎え、三女神が集合する